

しかも其後かの川上三吉が故山を出て、再び都門に來りしより、おもはぬ奇縁その身を濱町の戀壇にせらるゝと共に吉田雄藏また伴はれて其家に寄食し、漢英の二校舎に通ふこと二年、さらに學資を給せられて都下の私立中に隨一の名ある法律學校へ入りし以來、日夜たゞ暱勉として學窓の外に脇目も觸らざりし證據は、この啞に似たる山出しの初心者が議論百出の才子才物を遙に飛び越えて、卒業の曉を見れば優等第一の首坐を占めぬ、米を喰はぬ人間の住む因部の山奥より無一文に飛び出して、もし眼前に衣食の道を求むれば判事檢事辯護士の試験に保險付の男となりし上は、もはや兎も角も一の堂に上りしもの、されど烏なき里に歸つて大い蝙蝠となり、また徒らに都市住居の小康を願うて千態一様の業に従はむ事、そもく我本意にあらざるのみか、無事の運に叶うて猶かつ車夫か工夫となるべき筈の我をして今日あらしめたる川上三吉その人に感謝の道は未だ遙なりと、奮勵一番さらに大成の志を立てつゝ其まよ依然たる書生の境涯を保ちぬ、

吉田雄藏こよに當年二十六、うまれし故郷の山を這ひ降りてより十二年、佐伯の町を飛び出してより九年、前後十四年の行路を顧みれば茫として夢の如く事實また今昔の感に堪へざるべし、されど其身の生れし境涯と其身の歩みし行路と其身の今日あるを思へば、またこれ一個の好運兒、果して前途なほ此まよの好運兒たるべきか、今や人生の半途、茫として夢の如きは他日さらに多かるべく、今昔の感に堪へざるもの猶いよく幾年の後にあるべし、しかも浮世は千態萬狀の手段を以て人を弄び、人は千態萬狀の手段を以て浮世に對ひつゝ、その間に於ける運命の神は理論の外より襲ひ來つて更に一種の怪腕を揮はむとす、まして二十六の今日まで斯の如き好運兒は却つて浮世の魔力に靨はれ易く運命の怪腕に襲はるゝこと



多し、

山間に生るとものと、海邊に生るとものと、都會に生るとものと、これを成童以上に得たる境遇の感化より脱却して寒暖の點に合すれば、自然の性に於て歴々たる相違あるのみか、さらにはこれを身體髮膚の組織に就いて見れば、たとひ境遇の變遷に伴はるとも強弱大小は争ふべからざる一定の統計表を示して、人間また一の風土産物たり、されば鶏犬の聲を聞いて人家あるを知るといふよりも、狼の糞を見て人間あるを知るといふべき豊後の國の山奥に生れし吉田雄藏は、果して其風土産物に叶ひし骨格と容貌を保てるか、當年ことに二十六の曉を見れば、肉瘦せられたれど骨太くして、背は尋常人よりも高く五尺四寸餘、體量は外觀よりも重く十四貫目以上、首骨短く肩幅聳え胸圍廣くして腰の張り出でた

る體いかにも都人士の系統にあらざるを表白するのみか、元來の粗食に甘んじ多年の勉學に力めたれど、顔面の潤澤おのづから紅を帯びて全身の皮膚に乾燥せる色なく、眉は長く眼は細く鼻は高く口は大にして、威嚴の點と美男の評は下し難きも、何とやら無邪氣なる溫雅の中に一種の愛嬌を含みつゝ、起居振舞の餘りに靜肅なるところ今日一般の書生としては却つて活氣に乏しく見ゆれど、言語談話の聲高くして朗なるところ、寧ろ一切の舉動に反するかと思はる、また生れて衛生體育の何物たるを講ぜざれど二十六年來いまだ會て醫藥の何物たるも知らず、その衣を纏ひし時よりも衣を脱して裸體となりし骨格さらに一倍の健全を現し、暖國は長身にして寒國の如く肥肉ならざる例と山間は内その雄健を保ちて海邊の如く外その壯觀ならざる點と、凡そ故國の風土に感すべき有形的の組織ありとせば、遺憾なく完備せずと雖も吉田雄藏また確實に其中の一人たるべし、



只その産聲と共に作られたる自然の本性に於ては變らざれど、境遇に依り歲月に従ひ時に應じ處に化すべき外來刺撃の第二性に於ては、山より里に出で里より都に出で、加之も丸裸の無一物より今日の何物をか得たる吉田雄藏、誰か故郷の猪猿に名残を惜しんで出で來りし男と思ふべき、うかとすれば奇氣縱横を以て任ずる満都の才物その面を逆撫でにせらるべし、

其二

隱逸の君子を會釋もなく切り集めて俳優の肖顔を作る勢ひ、浮世の花よりも團子阪に限りて常さへ往來の雜沓織るが如くなれど、わづか阪の上を一二町も行けば千駄木の林町とて、その名に等しく山里めいたる林影參差の細道より根津の權現へ通ずる中途に、やうく三間まぐちの目にも立たざる二階家ながら、金利より割り出せし死節だらけの板張り普請にもあらで、どこやら我住居らしき格子戸の上に岡本かねといふ表札も新らしからず、御仕立物いた

し候といふ軒札の墨色も昨日今日でなし、

いづれ女名前に仕立物の看板かけしほどの事、まして淋しきところに内證ひッそりとせし住居、これまでは二階の半窓も閉ぢたるまよの用なく打過ぎしが、近ごろは更け行く闇にも戸の隙間もる灯影ほつとして、宵は猶更ら障子にうつる影法師、をりく動くを見れば正しく男なり、

女主人の二階に今まで見えざりし男の影法師、上も下も面は知らねど何とやら氣にかよる奴等、畜生どうすると叫んで過ぎ行くもあり、

人の眼に立つ花はなけれど、過ぎし昔の春は嘘やと思はるゝ姥櫻の四十後家、まだ艶を含みし生え際に色くつきりと白く冴えて、木綿の常著さへ垢づかぬ身の静閑に、戀しい亡夫の忘形見か今年十二三の男の子たゞ一人を抱へて、借屋でもない内證は其日の浮世にも追はれぬ



證據、仕立物いたし候の看板も冥加のための片手業と思へば、喰ふに困らず居るに困らず残る香はあり亭主はなし、あのまゝあれを白髪の婆にするかと惜しんだ近處の奴等も、その空二階に若い男が住み込んだと聞いて、また今更に自己の腰巾著でも仕て遣られし如く、おもはず無念の拳を握って、南無三寶との噂とりく、

春とは年の瀬を越えし名ばかりの空、吹き絶えぬ北風に梢を鳴らして、梅さへ苔の封じ目まだ固く、をりく雪の頬かぶりする一月の末、まして淋しき町外れの夜に入りては人の通ふ聲音もなく、かすかに聞ゆる按摩の笛と犬の遠吠なほさら耳に立ちて肌寒し、二階の六疊より梯子段の降口に射すランプの灯影ほつとして、階下には我子の寝顔を見返りながら針の手も忙しき日限の仕立物、はや夜の十一時を過ぎて、上も下も寂然と音なき中に

たゞ鐵瓶の湧く湯音のみ際立ちぬ、

『あのウ吉田さん、階下から失禮で御坐いますが、まだ御勉強ですか、あまり詰めて御精が出過ぎると却って貴君、いけませんよ、お茶でも入れますから、お談話かたぐ、降りて入らっしゃいませんか』いひつゝ鐵瓶の蓋をこらして額越しに見上ぐれば、ほんと片手に書物の上を叩きし音もろとも振り返りし如き聲、『ありがたう、なアに、これが書生の當然で、別に勉強といふぢやアないんですが、しかし何時です、ハ、アもう十一時を過ぎましたか、それでは、そろく夜具を引き出しますよ』お寢みの前に、まア貴君お茶でも、あんまり湯が能く湧いて居ますから『ぢやア折角の思召、一喫、いたゞきませうか、寢がけに茶を入れて飲むといふ人品でもないんですが、ハ、ハ、ハ、』さアく降りて入らっしゃい、しかし只お茶ばかりですよ、お菓子は御坐いませんから前以て念のために申し上げて置きます、ホ、



ホ、あとで御不足は聞きませんよ』  
やがて靜に降り來りし吉田雄藏、木綿飛白の綿入羽織に幾度か水を濡りし雙子縞の仕立直し、  
袴を下に重ねてシャツも著す足袋さへ穿かず、さりとして潔癖の性は襦袢代用に洗ひ易き白地  
の浴衣を肌はだに放さず、手足ぬつと出しながら少しも垢染まぬ皮膚の血色、自然の男艶に叶う  
て無意味の身體どこやらに一種の愛嬌を含みつゝ、會釋もろとも火鉢の前に坐して煙草も吸  
はぬ體、なほさら手持無沙汰の中に行き過ぎたる當世風の憎氣なし、  
人知れぬ内證に食ふだけの物あつて、家も残れど良人を失ひしより七八年、女主人の獨身に  
後家を立通して、よせくる浮世の浪風に世帯の尾も見せぬほどの女、まして作らば四十のう  
ちを五歳や六歳は確に揉み消すべき容色を持ちながら、今は葉櫻の影も靜閑に昔の花さへ語  
らぬ風情、そつと針の手を止めて居坐を直しつゝ、取り出す茶道具の扱ひも自然に馴れて腹

からの下司でなし、

『さア吉田さん、お茶は悪う御坐いますが、たゞ熱いのを御馳走に召し上つて下さい』や、  
結構です、どうして、なか／＼宜い茶だ』なアに貴君、番茶ですよ、お互に斯う、お心易く  
なつた以上お世辭は吉田さん、取つて仕舞ひませう、どうせ行き届かない勝ですから、お氣  
に召さないところは御遠慮なく、言つて戴いて、その代り及ばない事は及ばないまよで御勘  
辨を願ひますよ、ホ、ホ、ホ、』お世辭、何この書生肌しよせいはいだに世辭せじななかありまますももんが、あるも  
のは無遠慮と無作法ばかりですよ、實は萬事あまり氣を付け過ぎて下さるから、却つて、居  
辛いやうな時が、ハ、ハ、ハ、しかも早いもんだ、お世話になつて以來もう三月越しになる』お  
や、さうなりますか、なるほど去年の十一月でしたねエ、最初、入らした時は大變、むつ  
かしい方だと思つて少しは氣も置けましたが段々お心易くなつて、近來は、つい失禮ばかり、



第一お世話どころですか、手前こそ貴君のやうな方に來て戴いて、どれほど心丈夫になりましたか、まだ一言目には書生々と仰しやるが、萬事、よく存じて居りますよ、立派な學校を卒業なすつて、いつ何時でも充分な御身分になれる方だと、あのお常さんに聞いて居りますから『ハ、ハ、ハ、つまらない、餘計な事をいふもんだ、しかし彼お常婆さんは氣の好い人でね、僕が先生の家に居つた時分も萬事よく深切に世話してくれましたよ、ありやア女主人の古い馴染ですか』いえ貴君、實はね、もと手前方に出入した大工の妻女で御坐いますが、運わるく亭主に捨てられ子もないといふ理由で、かはいさうに貴君あの年まで奉公して居りますのさ、また手前方も其後の不運つゞきで一時相應に暮しました家作も地面もなくなり斯んな小さな家へ落魄れて、その上また良人に死なれるし、過ぎた事は一切たゞ夢のやうに諦めて居ります中は、ホ、ホ、ホ、申さば後家同士の舊の馴染で、どこに奉公して居ても昔を忘れ

ず尋ねて來てくれますよ、ところが去年の十月ごろでしたか、ふと來ました談話の序に、今、御奉公してる御屋敷に斯ういふ方があつて、どツか蒼蠅くない素人家の二階でも借りたいたの事から其他いろく委しう貴君の御様子を承つて、それでは幸ひといふやうな理由で、ホ、ホ、ホ、ですから其お屋敷の旦那様が博士とかいふ大學者で、また貴君も尋常の書生さんでなかつた事まで、よツく存じて居りますの、しかし吉田さん、女の妾どもが浅い料簡では、何時でも立派な御身分になれる筈の貴君が、まだ其上の御勉強とはいふもの、こんな二階に只お一人かうして御不自由勝に在らつしやるのが勿體ないやうで、何だか惜しいやうな氣が致しますよ『ハ、ハ、ハ、實際さうなら宜いが、何、まだ逆も無効ですよ、これからが勉強の最中で、やうく卵子の殻を出たばかりさ、せめて三五六の後にでもなれば、また身を立てる工夫も仕ますがね、まづそれまでは御覽の貧乏書生を押ツ通す決心です』『おや、



まア吉田さん今、貴君は二十六でせう、三十五六といへば此後まだ十年もありますよ」さやう、少くとも此上、十年ぐらゐ一所懸命に遣らないと逆も人間らしい人間にはなれませんよ、生意氣な事をいふやうですが、無事に飯喰ふのが目的でもないんですからなア」なるほど、御希望が大きいだけ世間普通の方と違つて、なか／＼お骨が折れますねエ、しかし吉田さん、お國の親御や御兄弟が嘸もア、お待遠く在らつしやるでせう」なアに國に兄と姉はあります、もはや兩親とも無いです、これでも親が居れば、また一時も早く家を持つて孝行を仕たくなるでせうが、風木の感で子は養はむとすれど親は在さず、しかも生れた國が國ですから、その兄や姉に東京へ來いと言つたところが、かう人間が隙間なく押し合つて住む市街の中へ出る筈がないですよ、日に一度ぐらゐ猪か猿の顔を見ないと何だか物足らないやうな山家ですもの、ハ、ハ、ハ、ハ、」あら、御談ばかり、いくら何でも、そんな土地がありますも

のか、日に一度も獸類の顔を見ずに濟まないのは動物園の吏員ですよ、ホ、ホ、ホ、」なるほど都人の料簡ちやア、さうでせう、しかし實際だ、僕も東京へ來てから始めて噂に聞いた米の飯を喰つたんです、この白い米の飯は女主人、僕の故郷ぢやア眞珠の粒を嚙むやうなもんだ」おや、眞實で御坐いますか、もし眞實のお談話なら、失禮ですが、そんな深い山國に生れた貴君が今こゝまで御修行の積んだ上、まだ／＼御勉強なさらうといふのは實に、猶更ら、お見上げ申した事で、よくまア世間の書生さんが結構な國の親御を泣かしたお金で學校は落第ばかりして遊んで居られるかと思ひますよ、妾も此通り今年十三になる男子が御坐います、どうか貴君のやうな方に仕込んで戴きたいと考へますよ」ハ、ハ、ハ、ハ、僕のやうなもん仕込まれちやア白髪が交つても破れ袴を穿いて家の持てない奴が出来ませ、しかし伶俐な子だ、才物になる生來だ、まして一粒種だから大切に立派に、行末を楽しんで、お育て



なさい』いえ吉田さん、一粒では御坐いません、まだ姉が居りますよ』はよア、さうですか、ぢやア猶更ら、お楽しみだ、その姉さんは今、どこに』はい、名は春と申して、ことし十七になります、小石川の或お屋敷方へ御奉公に出して御坐います、不束なもんでも女親は女の子で、あとに十三の男子一人を相手に淋しくは思ひますが、手許に我まよばかりさして居ッては却ッて本人の爲になるまいと存じまして、去年の夏、ところが吉田さん、妙なものですよ、家に居ります時分は、まるで小兒のやうな事ばかり仕て居ましたから、すぐ遁けて歸るかと思ひましたよ、ホ、ホ、ホ、どうか斯うか其まよ、案じるより易いもんでねエ』そりやア結構です、十七の姉さんに十三の弟とは宜い同胞だ』宜い同胞でも貴君、前途に餘地のある弟と違ッて姉は心配で御坐いますよ、いくら氣は小兒でも年が十七といへば、もう直に何とか、出来ないながらも身の始末を仕てやらねばなりませんからねエ、わけて足らぬ勝の

手薄い、女親一人の娘ですから、考へて見ると心細い、かはいさうなもんで御坐いますよ』  
『なるほど、子に於ける親の心は容易なもんでないですな』眞實で御坐いますよ、どうせ妾どもの娘ですから、此方で好む事は出来ませんが、もし縁さへあれば、氣立の優しい、深切な方で、今は兎も角、行末の見込ある人なら、假令どんな苦勞をさしても、かまはない決心で居りますの』いや御道理です、ところで十二時に近くなりましたな、もう一啖お茶を貰ッて寐ませう』おや、うか〜と自分の勝手な事ばかり、お饒舌をして、さぞ御迷惑で御坐いましたらう、あら吉田さん、もう其お茶は出ませんよ、お待ちなさい入れ替へて差上げますから』何これで宜しい、實は白湯で澤山だ、汲み置きの水でも濟むといふ便利に出来た身體ですよ、ハ、ハ、ハ、』まア酷い事を仰しやる、いくら御丈夫でも貴君お身體を大切になさらないと、いけませんよ、わけて今夜のやうな寒い晩は、ラツかりすると、お風を召します



よ、失禮ですか、妾方の夜具を一二枚お貸し申しませうか、有難いが猶更ら以て、それに及ばないです、北風の吹き入る破れ窓の下で膝小僧抱き寐に空腹の寒夜を凌いで来た結果、此くらの寒威ぢやア丸裸の轉び寐をしても高射ですよ、まして身體の上と下に綿の這入ったものを一枚づつ著て寐りやア天上界の安樂國、もし引けば風よりも熱を引きますな、ハ、ハ、ハ、

其三

今この境涯に無くて叶はぬ必要の書籍と夜具は一間の押入に藏めて餘地あり、身は三尺の机に向うて更に狭からず、志は九尺の半窓より遙の蒼空に伸べて、六疊の二階一間を暫時の假の宿、朝は根津権現の森に啼く鴉の聲と争うて目を覺し、夜は千駄木の梢を鳴らす風の音さへ死して後に枕を擁し、とろくと睡る半夜の夢に腦を休めて、たゞ一人こゝに寂寞と書を讀む時は木像に似たり、

されどこの木像、默然として愚鈍なるが如き中に一種不撓の論を保ち、端然として温和なる中に一片不屈の説を持ち、その言ふところと行ふところを見れば、宛ら引汐に現れたる洲を再び音なき潮の食むに等しく、いつしか人をして油斷大敵に襲はるゝの感あらしめぬ、されば前後六年の間に幾千人といふ同窓の學友中より、常に黙々たる此木像が最後の勝利に優等第一の首座を占めて業を卒へしのみか、その幾千人の學友中に今この六疊の二階を訪ひ来るもの一人もなく、自己また歩を運んで訪ひ行くもの一人もなきは、殆ど交際の何物たるを知らざる孤獨乾燥の無情漢に似たれど、誰か知る斯の無情漢には骨肉にも勝る刎頸の友あり滑かに流るゝ油の如き情もありて、ために人知れぬ無言の熱き涙を注ぐところは今日の輕薄才子が小説に於ける戀の外さらに解し得ざるべし、



朝夕は猶いまだ冬のまよなれど、流石に風なき晝は二月の末の日影、いつしか長閑なる春の心地して、はや藪鶯の初音ゆかしく、おもはず讀書の耳を欬てながら、机に片肱かけて背後の半窓を見返る折しも、門口の格子戸がらりと開いて、吉田雄藏といふもの居りますかとは正しく上田力、例の大兵より破鐘の音響に等しく呻り出す聲この二階の隅まで手に取る如く聞えぬ、

偕はと其まよ二階を駈け降りて、今しも出迎ひし女主の背後より會釋すれば、いつもながら五尺八寸二十貫目の達磨然たる大眼珠に見て取って、『やア吉田、居ったかい』『さア兎も角、二階へ、二階が城廓です』

わづか六疊の二階一室に掛けたるほどの梯子段、みしりくと音さして昇りゆく上田の體、宛ら蓼蛙の蟲を規うて巖に這ひ上るが如し、

「むよ、こりやア宜い二階だ、左右が壁で前後が半窓の六疊、しかも往來が騒動しからず裏手に家が建て詰らず、一人で勉強するにやア持つて來いの巢だ、どうして君、かういふところを見付け出した、なか／＼宜いわい、しかし探したぜ、手紙で町名も番地も心得て來たが、何分この邊の地理に暗いから、ぐる／＼と廻つて、よほど探したよ、あとで今、考へて見ると御苦勞千萬この門口は馬鹿な面して二度ばかり通つたんだ、ハ、ハ、ハ、ハ、『さうですか、ハ、ハ、ハ、ハ、しかし、よくあるこつてすよ、實は來て貰はうといふ料簡でなく、明日にも伺ふ心算で居たんですが、偕あのまよ不意に三月越しも隠れて、また唐突に伺つちやア、あまり勝手すぎた業と思ひましたから、まづ手紙で』『なアに其邊の事に會釋も何も入ったもんか、また例の一件で不意に暫く音信を絶つたといふ事も承知して居たさ』『いち／＼、さう、お察しが能過ぎて却つて困りますが、その後の柳島は如何ですな』『悲しむべし依然たる賭博公















のそりと上田まづ出立つれば、つゞいて吉田も首肯くが如く娘に目禮しながら、二人もろとも見返りもせず凡そ半町あまりも過ぎし後、『おい吉田、あの家は不可せ、出て仕舞へ、亭主のない女主人で、あんな娘があつちやア猶更ら瓜田の履だ、李下の冠また忽にすべからざるこつたぞ』ハ、ハ、ハ、吉田雄藏です、第一あの娘は今日、始めて見たばかり、どツか小石川邊の屋敷奉公してるさうですから『それにしても娘は娘だ、あの通り歸つて来るぢやアないか、君は宜いが、蒼蠅いよ世間の奴等ア、得て入らざる事を言ひたがるもんだ』『ぢやア、どツか外へ見付けて移轉しませう、しかし今日これから柳島へ往つた結果で、また今まで通り博士の家へ歸るやうになるかも知れませんなア』なるほど、それも、さうだな、ところで今日、川上に對して君は何といふ心算だ』つまり無用の辯を費すに足りません、二月の間、不意に懸れたやうなものの、頼まれただけの調べものは彼博士の許にあると等しく引きつゞ

いて力を盡した結果、こよに、これだけの材料を蒐めて持つて居るんですから、決して其意に反いた事實はないです、しかし吉田雄藏また別に一個の意見として、先刻も御覽に入れた通り一部の草稿およそ百五十ページに餘る反對説を持つて居ますから、これを見せた上で、その取捨に就いて、また何とか、兎も角あといふ決心力の強硬な人は注入的より開發的でないと効がありますまい』よし、ぢやアその覺悟で行かう、しかし實に辯者だからなア』ですから黙つて、頼まれた材料と共に反對説の草稿を突き付けて可否の一言を聞く理由です』なるほど、むよ、なるほど』

## 其四

山また山の奥より出でよ身は多年の風雨に曝せども心は浮世の塵にも垢にも染まぬ吉田雄藏と、うまれ得たる天生の潔白に苦學十年の結果は却つて當世の反比例を來せる上田力と、相



伴うて歩める體いかにも一種の奇氣を帯びて、おのづから時流に殊なれる風俗容貌、ほめて言へば輕薄の俗を放れたり、わるく見れば骨董の珍に近し、されど山生育の吉田に人知れぬ大俗中の議論と主義あり、また達磨に似たる上田に案外の洒落と滑稽ありて、ともに我みづから我一流を守りつゝ車馬喧騒の巷に翩翩たる眼前の才子才物を笑ふの概あれば、悠悠として事に迫らず、のツそりとして物に驚かず、吉田が履き古したる麻裏草履ほそく上田が齒の缺けたる日和下駄からく、あれでも世の中の金と女に氣はあるかと往來の眼に怪しまれながら、根津より谷中の一端をぬけて斜めに上野の池の端まで歩みしころ、都下百萬の人が其日に於ける咽喉三寸の苦樂貧富を分つべき午砲、ドンと鳴り響きぬ、

されど上田も吉田も途中たゞ一時の空腹に直接の金錢を費すべき男ならねば、互に平然として舌端の唾も呑み込まず、其まゝ打連れて語りながら、ふと何心なく見れば、三枚橋の際に車を乗り捨てよ此方へ來かよる一人の男、烏賊の磯めいたるトンビ姿も野暮の骨頂とや駱駝地を日本流の長合羽に仕立てたる洒落姿、同じ色の烏打帽に太き葉巻の煙を吹きつゝ、兩手を懷中に差入れて鼻唄の一節も呻りかねまじき面は例の黒田健次、ぞろりとして一見これはまた當世時流の汐先を二三町も走り過ぎたる體なり、

『おい吉田、あれ見ろ黒田の奴が來たぜ、待合の亭主となつて以來、野郎ますく満腹の俗氣を漲らして、のこく何處へ行くか、幸ひ今日は一番ぐつと閉口さしてやるから君、をかしく救濟説を取ツちやア不可ぜ』なるほど烏森の先生だ、しかし今日この途中で、わざく此方の暇を潰して閉口さすにも當らないでせう、また其うち『いや、逢つた時の勝負に仕ないと面白くない奴だ、まア黙つて君は見て居るさ、いはゆる局外中立だ、ハ、ハ、ハ、』



さらぬも眼に立つ二十貫目の大兵、のそくと歩を早めて進めば、何気なく葉巻の煙を吹いて出で来りし黒田、はつと思はず立停つて満面の苦笑ひ、化け損ねたる狸に似たり、

『やア上田、こりやア、どうも、妙なところで喰はしたな、ハ、、、』何、妙なところで喰はすもンか、此處ア正しく上野だ、しかし貴様どこへ行く、行く的に依つちやア随分、同伴つてやるぜ、乃公ばかりでない、幸ひ吉田も居るから』や、なるほど吉田も居るね、前途ますます多望の奇傑二人うち揃つて、つまり紛々たる俗界を冷眼一過の散歩といふ理由かね『奇傑二人たア變な挨拶する奴だな、おい吉田、ところで腹が空いたね、どうだ黒田、貴様まだ晝飯は濟まないだらう、ちやうど今が十二時だ、但し濟んだか、まだなら奢つてやるぜ、日本料理西洋料理乃至また折衷料理お好み次第だ、いくらでも金に文句はないぞ』さア仕舞つた、無遠慮な此大食家に時も時とて晝の十二時に出喰はしたは運の窮極、もはや

蛇に規はれし蛙と一般、逆も助からぬ五圓六圓は覺悟の上ながら、さて黙つて喰ふべき筈なく、いづれ例の破鐘聲で四邊も憚らぬ時世おくれの平凡議論を聞かされて、さんざ馳走した結句の果に淫賣宿の亭主と叫ぶ奴、あゝ何の因果で斯る野暮の骨頂漢を友達に持ちしか、さりとして金を出したまゝ遁け出さむとしても受取る奴ならねば、つまり今日の暗剣殺に向ひし我不幸、せめて吉田の温順なる初心この野暮仙を見兼ねて我への氣の毒さに何とか救濟の道を講ずべしと、流石の黒田も殆ど辻強盗に出逢ひし心地、おもはず自己が貰の烟に咽びながら、『ハ、、、實アまだ喰はないよ、幸ひ久しぶりの會食だ、しかし何を喰ふ、君等の好いたもんが宜からう』

上田その顔じろりと打守つて、吉田を見返りつゝ満面の微笑を含みながら、『この大通まだ喰はないといふから、面倒だが君、どツか其邊まで同伴つてやらうちやアないか、おい大通そ







口頭に追ひ歸すも易く眼前の利を喰はして蹂躪るも易けれど、奈何せむ自己みづから承知の野暮で頑固で無慾で無遠慮の上に入らざる道理と油断のならぬ滑稽を含みし十餘年來の親友、遁け出せば巡查の前でも飛び來つて搦むの面倒あり、争へば往來の人中でも破鐘の聲を張り上げて議論するの恐れあり、まだ圓轉滑脱の間に吞吐せむとしても元來この我を根本的に知りぬいたる奴、逆も今更ら遁るゝ道なく叶はぬ敵と觀念しながら、なほ間隙さへあれば吉田に紙入を渡さむとする體、上田じろゝ、背後より睨んで、『おい黒田、をかした事をするな、ハ、、、』

十二時過ぎより三時過ぎまで縦横無盡に上野の山内ぐるぐるの的もなく引き廻されて、たま／＼憩へば切株に腰うちかけながら前後より上田と吉田に娑婆ツ氣のない理詰の議論を持ち込まれ、流石の横著漢も腹は減る足は弱る身は疲れる頭は痛む氣は遠くなつて眼が舞ふかと

思ふばかりの體、おもはず半泣きの蓋面に苦しき大息ほつと吐きぬ、『おい／＼何とかして助けてくれよ、烏や獸類のやうに喰溜の出來る二十貫目の大兵でなし、白米の飯を知らない山の奥に育つた仙人の子でなし、照つても降つても日に三度、喰ふ時分に喰ふ物を喰はないと腹の調子が狂つて忽ち腦と胃に鈔からざる影響を及ぼす都下の人間だからなア、外の事は兎も角、兵糧責だけは助かりたい、ハ、、、、わるい洒落だぜ上田、おい吉田、第一その君が不可よ、をり／＼上田は得て人品にない斯ういふ兒戯に類した洒落をする男だ、しかし由來ことに眞面目の小心翼々を以て任じ任ぜらるゝ謹直の君が、のこ／＼平氣で附いて廻るたア大に其意を得ないこつた』いや、人は境遇に依つて第二の性となる目下の御自分、お察しは仕て居ますがね、わづか二時間や三時間ぐらゐで、さう急に弱い音を吐くべき貴兄でもないでせう、汐入村の昔おもへば亦これ多年の苦學難行より脱化し來れるもの、ハ、、、』



「こりやア面白い、如何にも面白い、川上の古名刺一枚を生命からぐの露として我々の哀を乞えた吉田その人が、やうくペンキ塗の學窓を出たばかりの口から、いやしくも浮世實戰の千軍萬馬を經來つた黒田に對つて第二の性をなした目下の身分、察してはやるが辛抱しろとは面白い御教訓だ、ぢやア吉田君、謹んで辛抱した後どう仕てくれる』いや、酷く御氣に觸りましたな、しかし由來の恩を荷ふこと多き後進の吉田が先輩の黒田健次その人に對つて禮を失したとは思ひません、さらに思はない、斷じて思はない、悲しいかな今は只これ一個の醜業人たる待合の御亭主を見るのみ』さうだ、淫賣宿の亭主野郎を見るのみだ、まだ吉田は此奴に對つて貴兄とか何とか言葉に多少の眞面目を含ますから不可、お察し申すも御氣に觸るもあつたもんか、ぐづく吐しやア幸ひ上野の山内で四邊に人はなし鐵拳こよにあり、どうだ黒田、それほど腹が空いて喰ひたくば去年の冬あの川上の家で喰ひ損ねた味を今

こよで舐めさしてやらうか、いや鳥や獸類のやうに喰溜が出来ないの山の奥に育つた仙人の子でないのと、けしからん事をいふ奴だ』ハ、ハ、ハ、ハ、どうも叶はない先生達だ、ちよいと軽い洒落にも滑稽にも直と眞ツ四角な切石のやうな重い理窟を敷き詰めて來るから閉口だ、ハハ、ハ、誰が今更ら吉田を捕へて野暮に怒る奴があるもんか、たゞ聊か與みし易しと見て取つた吉田に、鋒を向けて、うまく行けば威喝的の遁路を作る心算だつたのさ、ところが吉田また與みし易からず上田の氣焰いよく激烈で、もはや此上は萬事こよに休せりだ、しかし腹が減つたよ、腹が減つたばかりなら君まだ辛抱もするがね、かう伸べつ幕なしに激しく歩かされちやア實に堪らない、どうか此邊で僕に奢らしてくれよ』ハ、ハ、ハ、ハ、貴様のやうな根性骨の張り切つた横著な奴だから、たとひ義理ある借金取に出喰はしても容易に出すまいよ、ねエ、ところを乃公が雜言無禮の糞叩きに叩かれながら、半泣きの面で奢らしてくれたア聊



か物の哀れだ、なるほど考へて見ると多少まだ昔を忘れないところがあるらしいわい、しかし黒田、貴様の身に取ツちやア、とんでもない悪縁の深い嫌な友達を持つたなア『いや、決して悪縁の深い嫌な友達とも思はないが、現在こんな目に逢はされちやア事實また善縁の有難い好きな友達とも思ひかねる次第さ、ハ、ハ、ハ、』さういへば十中の一理また無きにしてもあらずだ、さらば此くらゐで上野を切り上げて、ねエ吉田、そろく浅草の方面へ出ようか、さア黒田、歩けよ、もう少しだ、いくら遅くツても二三分で行けるから『おやく、また浅草まで引き摺られて行くのかね、せめて鐵馬の便をかりたいなア、わづか一區三錢だ、圖ぬけた大男一人と世間普通の體量二人を積んで其塔載料は最少銀貨一個に及ばざるの至廉至便、實に今日の賜物だねエ』まア何でも宜いから早く歩けよ、鐵道馬車より持つて生れた膝栗毛が至廉至便だ、また幾何ら踏んでも大地は無價だ』

上田と吉田の二人に囚人の如く前後を守られて、馳せ違ふ人車の砂塵を浴び頻りに通ふ鐵道馬車を見送り見送りながら、廣徳寺前より埋堀を経て本願寺の寺中を通りぬけ、やうく浅草の雷門まで行きしころは午後四時過ぎ、さらに田舎者の見物めいて仲店を引歩かれ、また境内を一時間も追ひ廻されて、公園裏に出でし頃は五時半を過ぎぬ、

『ねエ吉田、あんまり可哀さうだから此邊で黒田に何か奢つてやらうぢやないか』さうですな、もう宜い時分でせう『おい、上田と吉田の兩奇傑、今更ら何を相談してるか知らないが、もはや黒田は奢らしてくれと言はないぞ、さア約束通りだ、奢つてくれ、奢つて貰ひたいもんだ、たとひ洒落でも滑稽でも言を食み人を欺くやうな平生の御人體ぢやアあるまい、何を奢つてくれる筈だ、さア奢つて戴かうか』黙つてろ、ちよいと今、考案中だ、同じ奢つてやるに仕ても、なるべく馳走してやらうと思つて考へ中だ、貴様また同じ御恩に預るなら



美味いものゝ方が宜からう』御意の通りだ、ぢやア黙ッて差控へてるから萬々よろしく頼む  
 ぜ、おい吉田、君も今この場合となつて責任は免れないぞ』  
 上田おもはず微笑を含んで、懐中より取出せし一錢銅貨三枚と五厘銅貨一枚、うやくしく  
 掌に上せて吉田を見返りつゝ黒田の鼻頭に突き出しぬ、『さア黒田これだけ奢ッてやるぞ、  
 かりそめにも一人前が一錢一厘六毛餘だ、おや此奴、變に妙な面をするぢやアないか、そも  
 くこの錢が通用しないか、何、そんな鼻糞で喰へるものがない、ないもんか、あるぞ、大  
 にあるぞ、焼芋だ、しかし轉び藝妓や馬鹿客の喰ひ荒した残肴冷酒に剛れた待合の亭主腹へ、  
 十有餘年來の親友が眞情を込めた焼芋を容るゝの餘地ありや否や、どうだ』喰ふ、大に喰ふ  
 から奢ッてくれ、さア何處で喰ふんだ』ハ、ハ、ハ、ハ、此奴いよく捨鉢になつて來たな、しか  
 し宜い料簡だ、ぢやア附隨て來い、喰はしてやるから』

上田は固より覺悟の前なれど、黒田は呆れて驚いて腹立まぎれの自棄腹、空腹、むしやくし  
 や腹、あとで口直しの會席料理でも喰はむとの面相、さらに勢ひ込んで歩み出せば、吉田お  
 もはず吹き出しぬ、

やがて半町ばかり行きし左側に、折しも夕ぐれ近き餘寒の珍味たゞこればかりと、釜の半面  
 を取圍んで先を争ふ下女子守の頭上より仁王の如き片手ぬツと差出して、三錢五厘と叫びつ  
 つ振り返れば吉田と黒田は門口に立ちぬ、

『さア黒田、約束通り奢ッてやつたぞ、これ見ろ、しかも川越の本場だ』いひつゝ三分して  
 一分を黒田に與へ、残る二分を吉田と共に上田まづ大口あいて喰へば、おのれ一人が小袖の  
 重ね著に駱駝地の長合羽を羽織りて絲絛の兩ぐり下駄に八幡黒の鼻緒といふ風俗、なほさら  
 人目に立ッて往來の丸かぶりは聊か閉口せしが、今この場となつて退くに退かれぬ二人の面



當、わざと平氣に芋の皮を剥きかけし手元、吉田ちらりと見て微笑を浮べながら、「黒田さん、その芋の皮は後で喰ふ心算ですか」きくや否、上田おもはず手を拍って「妙々、いかに

も警句だ、さア黒田その芋の皮を捨てる事ならんぞ、喰って仕舞へ錢の端だ」

流石の黒田も張り詰めし勇を一時に失うて、いよく今は最後の悲鳴をあげぬ、「おい上田、吉田、人死の出来る飢饉年が来りやア土でも石でも嚙るから、今日だけは許してくれ、連も僕ア君等に叶はない凡俗だ、諺にいふ餅の皮は剥かすとも、せめて芋の皮ぐるるは剥いて喰ひたいよ、ハ、ハ、ハ、また由來どれほどの氣に觸った事があるかア知らないが、五時間の餘も喰はず飲まずに引き摺り引廻して奢る」と言つた結局の果に一錢一厘六毛の御馳走で追ひ拂やア、もう澤山だ、いかな溜飲も下るだらうから、此邊で御放免を願ひたいもんだな」

「ハ、ハ、ハ、いよく往生しをったわい、ぢやア吉田そろく歸らうか、しかし黒田、今日に限らないぞ、今後どこで喰はしても見付け次第に此通りだ、どうせ捨てた奴でも面を見りやア儲また昔の情が湧いて来て捨てよも置かれないから、わざく暇を潰して、つまり貴様がために頂門の一針だ、ねエ吉田」如何にも、さうです、ところで黒田さん、願はくば今日の馬鹿にされた事を心外に思つて下さい」

黒田おもはず俯したる頭をあけて、額越しに夕暮の空を見上げながら、「善惡の巻に蟠つて左右の腕を自由自在の男一疋、どこを飛んでも跳ねても五體の急所を見せる僕ぢやアないが、さて怖るべきものは多年の間に皮肉を喰はれた友達の情だ、連も力や理窟で叶はない、何故また君等ア僕を捨てよ仕舞つてくれないんだ、苦學十年の結果を泥水の底に抛け込むやうな奴、わざく氣を揉んで過ぎた昔の餘情を寄せるだけの價値はないだらうぜ、しかし上田は上田そこが所謂上田として、おい吉田、君は汐入村の後殿を承つて、これから世の



中に駈け出さうといふ人間だ、も少し頭腦を冷かに持たないと不可せ僕の如き奴に未練を残して情に撥るやうぢやア前途また賞すべくして惜しむべきの結果を來すぜ、上田は尊ぶべく倉橋は感すべく川上は恐るべく斯くいふ黒田は捨つべき奴だ、そこで上田の情は僕こよに涙を以て感謝するが、君の情は寧ろ君のために屁とも思はない』

かくなりても元來の黒田、へらず口を叩いて面憎き一文句を残しながら立去る體に、上田も今更ら呆れて無言のまよの舌鼓を鳴らせど、吉田雄藏は何をか俄に感ぜしが如く、おもむろに振り返りて其後姿じつと見送りぬ、

其五

春といふ名は臥龍梅の梢を促せども、柳島の片蔭に餘寒いまだ去りかねて、なほさら、草屋の軒深く夜に入りし後、その川上三吉が籠居の門を叩くものあり、

折しも耳遠き飯炊の婆は厨にありて呼ぶも遅しと、今は身も心も軽く浮世に馴れたる妻女、そのまよ立出でよ門内より問へば、『吉田です、雄藏です、御面倒ながら、ちよいと開けて下さい』

もし必要あつて日記を誌せば、日に幾度の廁と箸とる時間まで漏らさず正確に書き入るべきほどの男が、忽然として姿を隠せしより三月越しの今夜、また忽然として訪ひ來し體いかにも深き仔細あるべしと、主人の川上おもはず居坐を直して待てば、やがて入り來る吉田雄藏、傍に一個の風呂敷包を置いて慇懃に頭を垂れぬ、

『やア吉田、どうしたね其後は、久しく來なかつたぢやアないか、ハ、ハ、ハ、しかし相變らず元氣で結構た、また何處に何をして居つても致々たる勉強力の弛まない點は正に信じて安心して居たさ、おい芳や、菓子でもないかね、兎も角茶の熱いのを頼むぜ、まさか夕飯



前といふ事はなからうな、それとも未だなら遠慮なく喰ふが宜い、此ごろは衛生と經濟の兩刀使ひで四分六の麥飯にして仕舞つたよ、但し一片の肉は腦を養ふため汽車の石炭に於けるが如く他を節して貯へてあるから、どうだね、喰ひ直さないか、ハ、ハ、ハ、ハ、相も變らず酒々落落たる體に、吉田いよく容を改めながら、「いや、何とも申譯のないこつて、しかし實は其間に、間違つたかは知りませんが一事の思慮があつて」さうだらう、君としては猶更ら然うあるべき筈だ、つまり取つて動かざる僕の決心を泣いて訴ふるが如き上田の情に挿まれて一時、ちよいと立往生した體だつたらうよ、ねエ、ところで今夜また不意に押し掛けて来たなア、もはや僕に關せず上田に關せず、別に君は君たる一個の意見を抱いて來たらしいな』や、全く中りました、如何にも其通りです、さう明かに見抜かれた以上は寧ろ訥辯の吉田に取つて僥倖の事、ぢやア簡單に只その要を搔い抓んで事實の範圍内に演べますが、諸お

頼みの材料は其後ますます力を盡して及ぶかぎりの結果、こよに持參して來ました、ついで別は一冊の草稿、こりやア師父にも勝る恩義の川上その人に對する吉田雄藏の苦諫泣争でなく、まづ一個の人物が賭博公開發を世に發表したものと見て、これに對する一個の法學書生が無遠慮に反抗の鋒を向けた論文です、取捨は兎も角、是非とも一覽を願ひたいもんですな』面白い、どうせ無人の境を行くやうな容易いこつてないから、四面楚歌の聲は固より覺悟の前だ、まして聞くが如き鋒鈍は好むところの敵だ、謹んで幾度も熟讀した後、もし服すべくンば兜を脱いで潔く陣門に降伏し、もし我戰鬪力に餘勇あらば未練氣なしの馬蹄にかけるぜ、ところで今夜の要件は以上こよに一先づ切り上げて、さて吉田、あの博士の許を不意に去つた後、どこに居つた、三歳兒の行方を失つた理由でもないから別段、強ひて探しも仕なかつたが、實ア下宿料とか何とか其邊の小さい俗事に就いて寧ろ心配したよ、ハ、ハ、



ハ、『いや、有難う御坐います、無論その邊の用意も何もなかつたんですが、幸ひ不用の書物を校友に乞はれて譲つた金と外に多少、四個月ばかり順送りに残つて居た小遣錢を掻き集めて、どうか斯うか、ハ、、、また目下の宿所は本郷の千駄木林町で、やはり博士の家に奉公してる婆さんの世話で、その二階を借りましたが、きのふ始めて端書を出すや否、上田さんが今日わざわざ来てくれましたから、實は同道で此家へ来る途中、ちよいと遅くなる理由があつて、しかも上田さんの家で夕飯を喰ひながら、うかと談話を仕た事が忽ち妻君の耳へ這入つて、すぐ禁足の嚴命、途中で無駄な暇を潰しながら夜に入つて柳島へ迷惑かけに行くんですかと、一言の下に先生ぐうの音も出さず、頻りに片手を振つて早く僕に行けといふ白眼黒眼の仕方、ハ、、、どう見ても一種の滑稽と言外の情を含んだ夫婦ですよ』『ハッハ、ハ、、、眼に見るやうだ、しかし其處が上田の珠玉で、彼が今日の社會に對する價值奈何

に關せず、妻に對する情と子に對する愛と友に對する誼とは實に當世不換金の寶とすべきところだ、只その寶たるや餘り不換金の寶に叶ひ過ぎて通常一般の嗜好に適せざるところが、今日上田の境涯を作る所以で、あといふ人物は其まよそつと塵埃の起たない田舎に置きたかつたよ、人類賣買の一大市場たるこの東京へ出て来て徒らに苦學十年の人となつたのが結局その身の不幸だ、もし彼に慰むべき妻子なく語るべき友なからしめば竟に憫れむべき寒心すべき結果を來すかも知れないね、ところで其上田に涙を振つて苦諫せらるゝ僕の苦しさア實に堪つたもんでないよ、無論、僕の今日を以て黒田の墮落と等しく思つちやア居ないやうだが、さて事實の示すところは汐入村の骨肉に勝る五人の中より何ぞ圖らむ、既に待合の亭主を出し將に賭博師の勸進元を出さむとする彼が苦惱轉輾、倉橋は波濤萬里の外にあり、現に餘すところは君たゞ一人だ、願はくば三人に代つて能く彼を慰藉してくれよ、もし僕に盡す



べき志あらば舉げて彼に盡してくれ、また妙な事をいふやうだが萬々一、將來に於て、前途その主義と立脚とに於て、たとひ已むを得ざる點より僕や黒田を捨つる事ありとも君、君は倉橋と上田を捨てよくれちやア不可ぜ、情を以て君のためになるものは上田だ、理を以て君のためになるものは倉橋だ、黒田は固より有害無用の一狂漢と見て差支なく、僕は寧ろ由來の關係上それ或は君の自由を縛する羈絆と見て宜いから、時と場合で君、會釋も遠慮も入らないこつた、一刀兩斷、猛然として取捨を決行するの勇を振ふべしだ、幸ひ君も今は社會に對つて獨行獨歩の出来る身體だからなア」

默然として聞き居たる吉田雄藏、病める牛の頭を擡ぐるが如く、しかも眼中に一滴の涙を含んで、川上三吉の面體じつと打守りながら膝を進めぬ、  
『どうしても貴兄ア、例の説を貫く決心ですな』無論、やッて退ける心算だ』なるほど、し

かし、吉田雄藏が偏に貴兄のため惜しむところ慄むところ恐るるところは、説そのものよ善惡よりも、社會そのものよ包圍攻撃よりも、一身そのものよ利害得失よりも、つまり事實の成敗奈何にあるんです、よし説が立つて社會に首肯かれて一身の難關ないにしたところで、今日の我國に於ける人事一切の程度上、果して事實それが行はれるもんでせうか』いや行はれない、出来ないといふのが衆口一致の確答で、誰が聞いたッて狂と笑はずんば愚と憫れむの外はないさ、しかし古今ともに天下の難しとするところ、いづれも皆これ多くは其時の愚と呼ばれ狂と罵られる奴が道を開いて後、いはゆる一般の才子才物が其道を押し合はして釋の觀を呈するもんだ、まして君これが四角い穴へ丸い棒を箝め込むやうな事に、  
に株式市場といひ米穀取引所といひ洋銀相場といひ銀行その他の諸會社に於ける金銀といひ抽籤法といひ物質交換的の必要に應ずる金錢にあらすして金錢そのものが直



勝敗の運を争ふ賭博公開の一端は事實、盛に大に行はれてるぢやアないか、たゞ其方法手と名目奈何にあるのみだ、今日ある方面の學者が頻りに唱へる社會主義より貧富平均論より富の分配権限を講ずる一種の經濟論者よりも、寧ろ容易に簡單に實行し得らるべきモンと信じてる、なるほど出来ない今から見れば勃然として不意に人心破壊的の大兇惡が飛び出したやうな恐慌もあるだらうが、さて出来た曉は君、今まで穀食の口に忽ち肉食の美味と滋養を知つたやうなモンだよ、ハ、ハ、ハ、ハ、いや、つい興に乗つて、うか／＼饒舌り出したが今夜ア斯事に就いて彼是いふ筈ぢやアなかつたね、ところで君、本郷の千駄木といやア随分これから遠い路程だ、宿らないか』ありがたう、なアに遠いと言つても高の知れた道程ですから、ぶらく運動のために歸りませう、また只今の御意見なか／＼面白く感じましたが、兎も角その草稿を見て下さい、まづ差當つて吉田雄藏が目下の貴兄に對するもの其一册より外

に御坐いません、もし百數十ページの内せめて半ページの文字でも貴兄に首肯して貰やア本望です』無論、漫然讀過しない覺悟だ、正に社會の一隅より起つた有力なる反響として讀むから、しかし宿れば宜いぢやアないか』何まだ九時になりますまい、しかも舊の十二日で月がありますよ』なるほど、さうだな、ぢやア近日また來るが宜い、これは別段これとして、ゆつくり遊び旁、ところで當分その林町の岡本といふ家に居る心算だね』さやう、都合に依ると、また元の博士家へ歸るかも知れませんが、その邊の事も近々あらためて伺つた時、御相談いたしたく思つて居ります』時に、金はあるかな、もう無からう、三月分そのまゝ溜つてるぜ』いや、それも近日、戴きに上りませう、まだ四五日の湯錢ぐらゐるはありますから、ハ、ハ、ハ、ハ、』



恥與萬人同、これ會て川上が濱町にありしころ、英雄また別に彫蟲の技ありと戯れて一個の桃華石に鐵筆を試みし文字、爾來その落款を用る來りしが、今や果して萬人と同じきを恥づるの氣慨こよに溢れつゝ、もし一步を誤れば萬人と異れるがために一身を賭せむとするの境に至れり、たとひ説は人に行はるとも事實は世に行はるとの難きを奈何せむ、あゝ我ための師父に等しき恩人をして竟に包圍攻撃の罵倒中に葬らしむるの憾を見るかと、吉田雄藏おもはず一種悲愴の感に打たれながら、柳島を立出でしは九時ごろ、いまだ夜は更けざれど本所の果の場末に人影もなく、やうく森の梢に上りし月は見渡す空の半面を照して、妙見堂に聞ゆる鉦の音いとど物淋し、

歸途の歩ついでに上田の許へ立寄りむとせしが、愛らしき我子の寢顔に夫婦もろとも暫しの浮世を忘るゝ中へ、また入らざる事を聞かさむも忍びぬ業と、其まゝ本所の割下水を横ぎり

て吾妻橋を渡り、こよばかりは晝夜を分たぬ淺草の繁華雜沓を見返りながら、上野の森影に出で池の端より根津の權現に至るまでの間、わづかの道にも走馬燈に等しき冷熱雅俗の相違ありと思へば、人事の窮達消長また怪しむに足らずと、我を追ふが如く迎ふが如き月を仰いで一種いふべからざるの感を興しぬ、

やがて林町に今の我境涯を包める假の宿、その門口に立寄りて靜に戸を叩けば、まだ寢もやらぬ體に内より答へしは女主と思ひの外、きよなれぬ艶を含みし小聲に、吉田雄藏おもはず耳を欬て、はつと容を改めぬ、

されど戸を開けて我を迎へしは正しく四十女の主人、いつもながらの笑顔に言葉さへ輕し、  
 『おや吉田さん、よくまア貴君お歸りでしたね、もう十二時ですから、逆も今夜は、と思つて居りましたよ、ホ、ホ、ホ、』いや、今ごろ舞ひ戻つて來て、お氣の毒です、わざわざ僕の



ために起きて居て下すッたんでせうな、恐縮々々『何さうでも御坐いませんよ、晝間お出かけの時に門口で、ちよいと御目にかよつた彼、娘が歸ッて来たもんですから、つい久しぶりで今まで、お春や、その火鉢の傍にあるランプへ火を點けておあけよ』『なアに宜しい、自分で點けますから』

あけし門の戸を閉め終るまで、何とやら流石その身一人が先立ちかねつよ、やうく女主と共に入りて娘を見れば、宛然これ浮世畫の名筆に描き出せる一幅の處女、幾度か擦れど火の出ぬマツチに其顔まづ火の如く赤めながら、眉を擧めて大前髪の額越しに母を見上げたる眼元は露の滴るに似たり、

『あれ、無器用な子だね、何を仕てるんだよ』『だッて此、此マツチがいけないんですもの』『ホ、ホ、マツチに口があつたら不足をいひますよ、さア火は母が點けるから和女、まづ御

挨拶を仕ないか、吉田さん、これが娘で春と申します、不束なもんで御坐いますが、何卒お心易く』いはれて其まよの無言に慇懃の挨拶振、わづかの月日なれど屋敷奉公せし身の何とやら崩さぬ自然の風儀を備へぬ、

吉田雄藏また慇懃の會釋もろとも、『去年の冬から大變お世話になつて居ます、時に女主人、もう十二時を過ぎましたね、ぢやア此まよ直と寐込みませうよ』『まア吉田さん、お茶でも一喫めし上ッて』いや、あんまり歩き過ぎた故か少々草臥れて居ますから、また明朝『草臥れて在らッしやれば猶更ら貴君、お氣が休まりますよ、お春その間に和女そのランプを二階へ持ッておいで』

心のうちには聊か面倒と思へど、眼前に辭しかねて其まよ其處に坐せば、わざと購求めしか娘が持ち歸りしか、ことし十三といふ男の子さへあるに、まだ手も付けぬ菓子折を開いて茶







東天の鴉に夢を破られ軒端の雀に枕を笑はれし事なき吉田雄藏も、ゆうべ寝られぬまよの曉方、とろくと一睡の後に目を覺せば、いつしか戸の隙間より旭日さし入りて我半面を射るのみか、折しも階下より娘が忍び足、そつと枕頭へ今朝の新聞を持ち來りし體に、心弱くも狸寝入の空躰、あゝ咄この一癡漢、そもく何のためぞと勇を鼓して兩眼くわつと見開けば、はや敵は去つて影なし、

雄藏おもはず蛇の鎌首に等しく頭を持ち上げて、四邊を見廻しつゝ冷かに浮べし片頬の笑は我みづから我を嘲りし體、そのまゝ跳ね起きて褌衣を脱ぎ替へ夜具を取方付けし後、何氣なく階下に降り行けば、『おや吉田さん今朝は平生にない事、御寛體で御坐いましたね、お春や其お嗽水を取つてから此お膳を出すんだよ』いや女主人、そんな事を仕られちやア困るよ、

自分の勝手にするから』なアに貴君、どうせ遊んで居りますもの、御遠慮なく使つて戴く方が身のためで御坐います、實は都合上お屋敷を下けまして今日から當分まづ手許に置く心算ですから、猶更お心易く』なるほど、しかし僕の用を仕て貰つちやア困りますよ、まして書生は書生で別に自分の境涯に應じた一個の風習といふものがありますからねエ、第一この二階を借りた時の約束が』あらまア吉田さん今ごろ何ですよ、そんな事を仰しやつて、兎も角お嗽水が取つて御坐いますから、お小言は後で伺ひませう、ホ、ホ、ホ、お固いにも程度のおつたもんです』困る、どうも困りますな、かう困らされちやア實際、全く困りますよ』何だか私ども母子で貴君お一人を窘めるやうに聞えますね、ホ、ホ、ホ、』いや窘められるより却つて辛いです』さう貴君お困りなんですか、それではね、お春や、あんまりお困りにならないやう、なるべく氣を付けて宜い加減に困らせておあげよ、ホ、ホ、ホ、』



其六

いかに猪猿を相手の山また山の奥に生れたればとて、いかに喰ふや喰はずの五人もろとも膝小僧抱き寐の境涯を経來ればとて、いかに三尺の學意を天地として校外一步を吹きぬく浮世の塵に染まざればとて、いかに其性の謹嚴寡黙にして身を守ること固く志を抱くこと大なればとて、吉田雄藏こよに二十六の曉、美人を見れば正しく眼に美人と見るべく、その優しき情に逢へば正しく心に嬉しかるべく、主なき春の名花一輪さらに露を含んで我ために彌増す色香いよく深ければ、これを一個の肉塊物として無意味の間に葬り去る事ますます難かるべし、

されど世の中に美人の数は一人にあらすして世の中に我は只これ一人なり、まして二十六の今この時期は我一身に再び來るべからず、つまりは我より外になき我一身を數ある美人のためめに投じ再び來らざる今この時期を今に限らぬ戀のために失せむ事、五より二を引いて三を答ふる如く小學校の生徒に問うても利害の數を誤らざるべし、さるを何ぞや苦學十年の丈夫兒をもく愚の極と、吉田雄藏おもはず兩の拳をあけて机を叩けば、硯が踊って自己の滿面に墨痕淋漓、やア仕舞ツたと叫ぶ聲に階下より娘の春が上り來て、「おやまア、どうなさいましたの其お顔は、ホ、ホ、ホ、あら、お袖で、いけませんよ、すぐ今お手拭と水を持ッてまゐりますから』

あゝ去るべし、あゝ去るべし、去るに如かず、去るより外に策も力もなし、小學校の生徒も忽ち言下に答へ得べき簡單の數と思ひしに、何ぞ圖らむ古今の大學者が首骨を折り並べても容易に知るべからざる道理の外と、人知れぬ舌を巻いて今更の不思議に驚きぬ、



さるにても山家生育の我、いづこに都人士の風を帯びたる、見るが如くに生れし我容貌、いづこに眉目清秀の形を備へたる、前途の志ありとはいへ今は斯くの境涯、何として婦女子の意を惹くべき、取ツて動かざる一片の主義ありとも所謂の當世の才子才物にあらざる斯くの状態、そもくいづこに何の趣味を求むべき、華奢風流を解せざるの一書生、艶冶綺語を知らざるの野暮漢、またこれ道理の外の不思議に捕へられたるかと思へば、油斷大敵いよく以て怖し、

あり餘る世帯ならねど、用の外に出歩かねば、さして其日の浮世にも追ひ詰められぬほどの内證、こつそりと四十後家の女主人に十七の娘と十三の弟、母子三人が水入らずの朝夕を無事に保ちて、空ふく世間の雨にも風にも當らず、おのが羽翼の分を知る小鳥の葉蔭に棲むが

如し、

今を盛に荒れ廻る弟は學校に通うて、猶更ら靜閑なる縁端の障子を明け放しつゝ、いつしか春めきし軒の日影に氣を誘はれながら、どこの物見遊山に出るではなく、わづかの庭に萌え出でし小草の色に心を慰めて、これも浮世を渡る片手業、をりく針の糸目を休めて物語りぬ、

『ねエ、おツ母さん、妾も斯な著物が欲しい事ね、どういふ女が著るんでせう』氣樂な事ばかり言ふよ、呉服屋が出入して和女そんな物が絶えず著られるやうな身分なら、人の仕立物なんか仕ないさ、しかし人間の運といふものは分らないから、いくら此著物を常著にする女だつて、また木綿の洗濯物を晴著に仕ないとも限らないし、和女だつて運と心掛次第で人に仕立物をさすやうになれないとも限らないのが世の中だよ、わけて女は其身の伶俐ばかりで



世が渡れないんだから、どうせ持つ御亭主が肝要だよ、男が好くつても金があつても馬鹿ぢやア末が覺束なし、また腕があつても働きがあつても身持が悪けりやア仕方がなし、つまり二階の、あの吉田さんのやうに學問があつて氣立が優しくつて沈著いて口數の少い腹の底の確固な方が眞實の男だよ、だから和女も其氣で如才なく、しつかり仕ないと不可よ、年ごろの娘を持つた母の氣は和女どれほど苦勞するものか、寢た間も惘然して居ないんだよ、母なんかは和女の年に、お嫁入して來たんだからねエ』あら、おツ母さん、いやな事を、ホ、ホ、『何が呵しいもんかね、眞實の事さ、十七といへば和女、もう男の大人も同然なもの、うかくいつまで小兒で居られるもんでないよ、はやく吉田さんのやうな末の見込のある方を御亭主に持つて、母に安心さしておくれ』大變おツ母さんは吉田さん最辰です事ね、さう吉田さんは豪い方なんですか、あれで』あれでとは和女、何をいふんだね、失禮な、あれが

取も直さず豪い方なんだよ、今時の書生さんを御覽、ろくに學問も出來ないくせに僅な事を鼻にかけて、いやに行き過ぎた生意氣な口ばかり達者で、しかも虚飾家で虚言家で薄情で放蕩で、箸にも棒にもかからない人達が多いぢやアないか』ほんたうですよ、おツ母さん、さういへば現に一人、そんな人が小石川のお屋敷にも居りましたの、井出さんといふ名で實は奥様の甥に當る方ですから、外の書生さんとは違つて萬事、丁寧にすればするほど威張り返つてさ、其上、いやに粧飾して、變な氣觸な事ばかりいふ人ですよ、旦那様も奥様も好い方で御奉公の仕宜い割に幾人お小間使ひが來ても續かないのは、その井出さんといふ人が居るからださうです、妾だつて、井出さんさへ居なければ、達て、お暇を取りたくもないんです、何だか薄氣味が悪くつて』それ御覽、そんな人が多いんだよ、和女も早くお暇を戴いて宜かつた、もし萬一の事でもあつた時は、あとで悔んでも取返しがないからねエ、とか



く生んだ母の見立てた人が大丈夫だよ』ホ、ホ、ホ、おツ母さんは、まるで物が取極つたやうな事を、ホ、ホ、また、どツか外へ御奉公に上つても宜いんですよ、妾は『餘計な事をいはずと黙つて家にお居で、出して宜くば母が出します』だから、無理に出たいとも何とも、いつた理由でないんですよ、たゞ出ても宜いと、思つてさ』思はなくつても宜しい、何事も母の指圖通りにさへすれば、それで宜いんだよ和女は、子のために悪く思ふ母が何處にあるもんかね、よく考へて御覽な』

我知らず互に針の手を止めて、隔てぬ母子が思ひ思はるゝ心と心、つい口頭に打解け過ぎて顔を見合はす折しも、俄に人車の轆棒を卸せし音、やがて門口の格子戸がらくと開いて、正しく男の聲、『たのむ、たのむ』

立ちかけし母よりも娘の身は軽く、其まゝ出でし障子の外、おやといふ聲もろとも、また忽

ち物に追はると如く入り來りて肩うち撃めながら耳に口、『おツ母さん、どう仕ませう、今いた其、それ井出さんといふ氣觸な人が、いやですよ妾、二階へでも隠れませうか』きくや否、母親おもはず小首を傾けて膝立直しつと、『仕方がないから此處へ、今更ら隠れたりすると却つて悪いよ、まア兎も角、どんな用か、母が、和女は黙つてるんだよ』

娘に代りて母親が立出でつと、迎へ入れし男を見れば、のツペりとした色白の二十三四、遠目に大島ながら近寄れば米澤紬の二枚袷を重ねて、吹けば飛ぶやうなる輕き魚子の五所紋、薄色縮緬の襦袢の袖口ちらく、女物の片側を仕立て直せしかと思はるゝ襦珍織の角帯に怪しき金色の鎖を巻き付けて、わざと時計は山の端を出し三分一の月形に現しつと、片手に香水を含みし絹のハンカチーフを丸めて放さず、片手は常に懐中のまゝぬツとした容體、膝を斜めに身を反し唇端を結んで横目を使ひ、てかくと摺り磨いたる額際を春の日影に照らして、



煙草盆はありながら葉巻でもない紙の細巻に蠟マツチの火を摺り出し、折角の茶も一目じろりと見たばかり、これで物いはねば猶まだしもなれど、變な調子に嫌な呼吸の色氣が溢れて、寸隙があれば端唄の一節も呻りたいといふ難物、あと何が因果で態と斯んな男になりたいやら、元來の生れ質は世間の十人並、丸裸で寢惚けた面が却って見好いかと思はれぬ、

『やア、これは始めて、おツ母さんですか、小石川の井出といふもんです、定めて春さんから萬々お聞き及びでせうが、ハ、ハ、ハ、ちよいと今日は團子阪まで来た用がありましたから、ついでに』それはく、恐れ入ります、よくまア斯やうな見苦しいところへ、また改めて申し上げるも、何で御坐いますが、不束なものを、いろくお世話になりました『なアに世話どころか、此方が却って迷惑をかけたかも知れないさ、ハ、ハ、ハ、しかし春さん、どう仕たもんだね、唐突に歸りつきりは少々、酷いよ、しかし何かおめでたい下用意とでもいふやう

な理由かね、ハ、ハ、ハ、『いえ貴君、どう致しまして、御覽の通りの身分で、たゞ妾の手助けに、お屋敷の御都合も伺ひませす不意に御暇を戴きまして何とも申譯は御坐いませんが、娘が歸りました翌日、すぐ最初の世話いたしてくれました人を差上げて、委細お願ひ申し上げた筈で、また外に御奉公人も澤山、これ一人で差當つての御用も缺けまいかと、自分勝手な事ばかり考へまして、ホ、ハ、ハ、『いや、世話人が暇を取りに來た事も知ッてるがね、あんまり不意だから、實ア變に思ッてさ、第一、家内中の者が皆、惜しんで居るよ、しかし親許の都合とありやア仕方がないさ、ねエ、ところで、そんな事は俵置いて、どうだね、今日ちやアないが、一日、どツか花見にでも出かけませうかな、無論おツ母さんも同伴だよ、まだ外に其方の連があつても宜いさ、なるべくは少しぐらゐる遠出してね、いやもう時候が時候だから毎日々々友達に責められて者蠅いほど誘はれるが、さて理窟ッほい連中ちやア、さ



らに面白くないよ、たゞ此方が旗頭に立てられて軍用金を仰せ付かるばかりだからア、ハツハ、、、、『御身分から嘸まア、いろんな人達が御無理を願ッて出る事で御坐いませう、妾どもも僥倖お言葉に甘へて、お供を致したう存じますが、何分、かやうな餘所様の仕立物に追はれまして、第一また晴がましい物見遊山の衆中へ貴君、身の支度も出来ないものが、お顔の廣い方は猶更の事、其お顔を潰すやうな理由になりますから、ホ、、、、『や、そりやア少々、聊か聞えない御辭退と謂ふべしだね、何も衣裳や帶を見せに行くんぢやアなし、花を見に行くのさ、しかも其花が恥ぢて凋むほどの美貌に衣裳も帶も入るもんか、是非そのまよ、却ッて常著のまよが宜い、どうだ皆よく見ろ、飾らなくッて此くらゐといふところが生命さ、片寄れく刃物なしの人殺し、これで御坐いと大勢の中を割ッて通りたいもんだ、ハ、、、しかし戲談は儲置いて近日のうち』はい、有難うは御坐いますが、只今も申し上げ

ました通りの理由で』さアその理由も絲瓜も入らないぢやアないか、つい手軽く、ちよいとねエ、春さん、日は兎も角、まア行くと極めるさ』いえ、そんな事は、妾の料簡で極められませんから、また花なんか見たくも御坐いませんわ』あれ、この子は失禮な御挨拶をするよ、折角あゝ仰しやるんだもの、お供は出来ないにしても、お謝絶の爲やうがあつたもんだに貴君この通りの我まよで御坐いますから、ホ、、、しかし和女、ちよいと御免を蒙ッて、お二階の火鉢に火でも消えてないか鐵瓶のお湯でも冷めてないか、よく見ておいで、此方で氣を付けてあげないと何とも仰しやらない方だから、さア早くよ』

階下には胸が痛むほど嫌で居られず、二階へは何とやら顔が赤らむほど氣が咎めて上れず、さりとして今は上と下との境に身を置き兼ねつよ、其まよ上りゆく後姿を、じろりと横眼の額越しに睨みあけて、おもはぬ旋風に掌中の物を吹き取られし體、我知らず膝を進めながら『こ



の二階に誰か、人が居るんですかね』はい、近ごろ、ちよいと、妾どもの都合上、借りていたどいた方が御坐いまして』むとそりやア淋しくなくて宜いでせう、全體どういふ人ですか』やはり貴君、まだお若い、書生さんで、たしか今年、二十六とか仰しやいましたが』はア書生が、どこの學校へ通つてる書生です』いえ別段、どこへも、たゞ家で御勉強ばかりなすつてる方で』そいつア少々、變だな、これといふ極つた學校へも通はない此ごろの書生にやア随分、油斷のならない、風の悪い奴があるから、わけて女世帯の素人家を探し歩いて、づう／＼しく錨を卸すやうな奴ア、得て一物のあるもんだから、うツかりすると狸の御宿申せし恐れありだ、ハ、ハ、ハ、』お心付け有難うは御坐いますが、決して、さやうな方では』その決してが大に決してどないやうな結果になるもんでね、兎に角、用心に如くはなし、火の元の御用心々々々、ハ、ハ、ハ、時に便所は何處ですな、ちよいと借りたい、何、案内に及ば

ず、つい指頭で、なるほど、あれだな』

二階には吉田雄藏たゞ一人、默然として木像の如く机に對ひながら、五六冊の書物を開いたまよの左に積み重ねて右には筆を執りつゝ何をか起稿の體、をりしも靜に音なく上り來て火鉢を見れば生憎火もあり鐵瓶の湯もありて、しよんほり手持無沙汰に起ちも得やらず坐しもせぬ恥かし氣の風情を、雄藏おもむろに見返りて、『よろしいよ、かまはずに置いて下さい、煙草も茶も入らない人間だから』それでも吉田さん、お茶ぐらゐる貴君、ちよいと、入れて差上げませうか』いや、それに及びません、咽喉が乾けば湯で結構、ハ、ハ、ハ、厄介のない代り愛嬌のない奴ですよ、どうか階下へ、お客があるんでせう』いえ、お客ぢや御坐いませんの、いやな人で、側に居るのが何より辛いもんですから、つい、お邪魔に、あの吉田さん、箒を倒に立てると早く歸るやうに言ひますが、眞實でせうかね』さア、どうですか、困つた問題で



すな、しかし事實そんな馬鹿けた理由がないでせうよ、ハ、ハ、ハ、『ちやア貴君、どう仕たら早く歸りませう、實は、おッ母さんも大變、迷惑して居りますから』むよなるほど、さういふ筋の客ですか、いや、お察し申します、しかし僕が立入って横合から物をいふも變ですな、もし萬一、いよくお困りの場合には、役に立たないながら随分、そりやア出て談話を仕ても宜いですがね、さういふ事に法學生は却って、いけませんよ、理窟ばかり先に立って『何んな人は、理窟でも何でも早く追ひ歸していただく方が』いや、それにしても結果、事實が物いふ奴ですから、あまり感情を害すると此方の不利益を急ぐやうな理由で、しかし、お困りですな』全く困りますよ、妾は黙って傍で聞いて居るばかりですが、猶更ら辛くって、辛くって、どう仕ようかと思ひますの』ちやア斯うませう、僕が便所へでも行くやうな風をして、ちよいと何氣なしに降ります、ね、そこで、おッ母さんが何とか言へば、幸ひ其場の

都合で、また何とか口の出しやうもありますから、兎角さういふ相手を怒らして仕舞つちやアいけませんよ』さうですなエ、あんな押の強い、づうくしい人を怒らして仕舞つては、何を仕出すか却つて後が面倒で御坐いますから』その通りです、まア降りて見ませう』吉田雄藏そのまゝ起つて靜に梯子段を降り行きつと、脇目も觸らぬ慇懃の會釋もろとも便所に入り、やがて出て來りて手を洗ひながら、外貌に似合はぬ奴と始めて客の面じろり打守れば、客も此奴かと吉田の面體じろり睨み返しぬ、女主は思はず膝を寬めて振り返りながら、擧める眉を俄に打開きつと、『吉田さん今朝から少しも降りて入らツしやいません事ね、あまり御精が出過ぎますよ、ちと貴君お談話なさいましな』ありがたう、しかし、まだ早いでせう晝飯には、第一お客が』いえ、かまはないと申しては甚だ恐れ入りますが、大變お捌けなすつた方ですから、また妾のやうなものが御相



手いたして居つても、やはり、殿方は殿方同士で、おや、お春は二階へ上つたまゝ何を仕て居ますか、あゝいふ我まゝな勝手もんで御坐いますよ、ホ、、、さア吉田さん兎も角こちらへ』

現在おのれが事を眼前に譏られても、其まゝ黙然として見返りもせぬ筈の男ながら、軽く首肯いて座に著きつゝ、『こりやア初めまして、失禮ですが女主人、どちらの方です』はい、あのウ何で御坐いますよ、お春が過日まで御奉公して居つた其お屋敷の方で、實は妾も今日、初めて御目にかゝりますの』はてな、ぢやアこれまで別段、何も、どう斯うといふ關係のない方ですな』おもはず眉を打寄せ小首を傾けて、何とやら俄に拍子ぬけたる體を、身は眞正面に對ひながら目は横に冷かなる一種の微笑もろとも、『僕は井出といふもんですが、何か御不審のこつてもありませんかね、どうも變ですな君の言葉ア、これまで關係があるかとか無い

かとか、ハ、、、まるで當家の主人公然たりだ、但し養子にでもならうといふ、いや、既に、なつた覺悟ですかね、きくところぢやア君まだ少し早いよ、何をする何處の書生かア知らないが、ほんの只の二階を借りてるといふ事だけは聞いたさ、そいつが君、御大層に、ハツハ、、、』

藤葛を腰帶にして山家生育の骨太に生れたる吉田雄藏、いざとなれば下手な春畫草紙の殿様めいたる奴を一疋、とつて捻ぢ伏せむこと豆を顛がすよりも易けれど、人の言葉尻を捉へて無用の爭論する男ならねば、たゞ自己が見當違ひに恥ぢて其まゝすつと座を起つや否、失敬の一語を残して遁ぐるが如く二階へ駆け上りぬ、

井出は懐手のまゝ例の上目いよく冷かに、ふんと鼻頭の笑を軽く肩に譲りて、『何だ、ありやア、廉ッほい花火線香のやうに、しゅツと消え際の脆さ加減が呵しいよ、ハ、、、いや、し



かし思つたよりは人の悪くなさうな奴さ、こいつア叶はないと見るや否、すぐ遁け出したところが正直だね、まア安心して置いてやんなさい、ハ、、、とここで今日は何だか變な調子だ、あんまり長居しても妙でなからう、ぢやアまた其うち、雲がくれの春さんに宜しく『どうも貴君、とんだ失禮ばかり致しまして、何の、お愛相も』なアに今日は先づ今日の幕として置いてさ、今度また來た時お愛相を仕ていたどうかうよ、ハ、、、』  
病魔を送り出せし如く、ほつと息して其まよ二階へ上り見れば、お春の此方の窓に身を凭せて何とやら打沈む體、吉田は彼方の机に向うて無言のまよに讀書の體、『和女そこに何を仕てるの』おッ母さん、とんだ事をしましたよ、吉田さんに謝つて下さいな』おや、何また和女、失禮な事を仕たんだよ、あの吉田さん、只今は、どうも變な人で、嘸お困りで御坐いましたらう、また春が何か、お氣に觸るやうな事でも致しましたのですか』いや、全く僕が悪いのさ、

實ア今の客ね、あれを妙な工合に考へて、ハ、、、お春さんが二階へ來て、頻りに困るゝといふ其、困り方が如何にも、それらしかつたから、甚だ失敬な理由だが、何か催促がましい事で動かない奴と思つたのが間違ひの原因さ、しかも場合に依つちやア口を出さうと思つたのが猶更の大明違ひ、いやはや、面目次第もないこつて、はふくの體に通け出しましたよ、ハ、、、、恰度女主人が過日あの上田を兄と間違つたやうなもンさ、つまり復仇を仕られたんだな、ハ、、、、『あら、さうですか、道理で、實は變だと思ひましたよ、ずつと降りて入らした工合から、始めての人に貴君が、ホ、、、、しかし和女よく氣を付けて物を言はないと不可よ、相手が相手に吉田さんが斯ういふ御氣性の方だから宜いやうなもの、もし外の人だったら兩方へ御迷惑かけて、それこそ大變な事になるよ、ですがね吉田さん、おかげで助かりました事、まア貴君、あの氣觸な、忌味つたらしい風で、づうづうし



く坐り込まれて、いろんな事を言はれたには實に閉口いたしましたよ、一時は貴君、どう仕  
ようかと思つて、お春が御奉公した家の人だといふから、まさか追ひ出す事も出来ませぬね」  
『しかし僕が降りて往つて、不意に妙な事を言つたから、定めて怒つたまゝ歸つたんでせう  
な、考へて見ると氣の毒な事をしましたわい』『何、貴君、氣の毒なもんですか、よし怒つた  
つても宜しう御坐いますよ、却つて此方が助かりますから、ねエお春』『眞實ですよ、お母  
さん、あんな嫌な人が、いくら怒つたつて、どう仕たつて、もし今度また來るやうな事があ  
つたら、其時こそ妾が出て、門口から歸つて貰ひますわ、お母さんが今日あんまり遠慮な  
さり過ぎるもんだから、宜い氣になつて、あゝ押の強い事ばかり言ひ出すんですよ、傍で聞  
いて居ても、自烈つたくつて自烈つたくつて』『ホ、ホ、ホ、和女まア大變、急に強くなつた事  
ね』『なに最初から、さう思つて居たんですが、妾に物を言つちやア不可々々と、無理に黙ら

されたもんですから、つい、吉田さんまで御迷惑をかけるやうになつたんですよ』『ホ、ホ、  
まるで母一人が悪いんだね、ぢやア吉田さんにも母一人で謝つて置ませう』『いえ、そりや  
ア妾も、謝りますがね、大體お母さんが、あんな人に丁寧すぎたからですよ』『はい、以  
後は氣を付けて、なるべく心得ませう、ホ、ホ、』  
母子が無邪氣の争ひを背後に聞きながら、壁に對ひ机によりて見返りもせぬ吉田雄藏、また  
例の木像かと思へば此木像いつしか名作の不思議を現して、何とやら眉目の間に一種いふべ  
からざる苦笑ひを呈しぬ、

其七

元來の容貌に於て眼前の境涯に於て、また自然の性に於て利害の數に於て、そもくこの我  
を何の見るところがある、もし見るところありとせば唯それ不言不語の我宿志にあるのみ、



苟も有形の外に取らずして無形の内に取るは堂々たる知名の士と雖も猶かつ難しとするところ、さるを母子が斯くまで我に盡すの情緒纏綿、おもへば我宿志を遮るべき戀は身を削るの斧にあらすして、寧ろ或は我宿志を助くべき愛は身を養ふの露なるべき乎、

曉の鐘に耳を欬て、將に起き出でむとするの時、夜更け人定まりて枕に就かむとするの時、流石の吉田雄藏も幾度か睡りかねつゝ起きかねつゝ、おもはず天井の節穴を數へ無心の壁に問うて人知れぬ心に迷ひしが、また忽ち猛然として現じ出す一個の木強漢、あゝ去るべし去るべし去るべし、

終夜ら睡りもやらで机に對ひし其まよの曉を待つて家を飛び出し、團子阪より谷中を経て上野の山内を巡りながら、やうく八時ごろに立歸つて朝飯の箸を措くや否、およそ二時間あまりも二階の片隅に閉ぢ籠りしが、また十時ごろに立出でて例の健脚、兩國の上田が許を訪へば、生憎の不在なれど妻女が勧めに晝飯を終りし後、さらに柳島の川上が許を訪ひしに、これまた不在と聞いて何をか鉛筆の一書を残しながら、草臥れたる顔色もなき足早に根津の権現横町まで歸り來りし頃は、はや夕暮の空近く春の夕陽は森の彼方に沈みかよりぬ、折しも後より駈け來つて我背に突き當りしもの、はつと思はず蹠躑きながら振り返れば、壯士めいたる二十四五の一書生、大のステッキを取直しながら、「おい君、なぜ僕に突き當つた、さア許さんぞ此奴、返答次第でステッキが飛ぶから覺悟しろ、貴様ア全體どこのもんだ」流石の吉田も今は堪へ兼ねし憤怒の顔色、我を忘れて拳を握りし折しも、また背後より三四人の書生、どやくと一時に現れて、「何を何、どうした、この野郎が、けしからん奴だ」それと叫ぶ聲もろとも、忽ち四方を取圍んで鐵拳雨の如し、



平生は睡るに似たる温順の吉田雄藏ながら、元來は猪猿を相手の山家生育、しかも二十六の今日まで醫藥の何物たるを知らざる筋骨健全に思ひの外の力量を備へて、のツそりと音なき其性の不屈不撓は牛の如き男、もはや叶はぬ絶體絶命と見るや否、満面に血氣を帯びて俄に荒れ出せし猛牛の勢ひ、無言のまゝに一步も退かず攔んで蹴つて前後左右に跳ね飛ばせば、かゝる奴原の常慣、ばら／＼と今更に驚いて木葉の如く四方へ遁け散りぬ、

吉田雄藏、ほつと大息を吐きながら、なほ残る憤怒の眼を見張つて睨めども、はや敵は逃げ去つたり四邊は夕暮の空に人の山、しかも見物の中より小兒の聲として、やア斬られたと叫ぶを聞くや否、その身を遁ぐるが如く立去つて、足早に歩みつゝ片手に顔を撫で下せば、べつとりと掌に含みし血汐は糊の如し、

南無三寶、下駄と拳とステッキばかりと思ひの外、きよ及ぶ悪書生の大ナイフ、さては刃物

を持ちし奴が居りしか、そも／＼我この東京に出でしより十年の間、孤影みづから守りて無口に過ぎたる事はありとも、交りて誰一人に何の怨恨を含れまし覺もなく、まして無頼の壯士めいたる墮落書生に一點の恩仇あるべき筈もなき我を、過誤か悪戯か人違ひかと、まだ残る無念の拳に流るゝ血汐を押へながら指を伸ばして探れば毛の中より左の額際に餘りて冷りと二三寸の斬疵、また今更に歩を停めて驚きぬ、

わづか天井板一枚を隔てゝ六疊一室の二階にありながら、ことし二十六の男が鼠一疋の梁を傳ふ音もなく、ひツそりと閉ぢ籠りて机に對ひしまゝ木像の如くなれど、たま／＼出るといへば朝より夜に入るまで健脚にまかして何處を駆け廻るやら、飾らぬうちの凜々しい風俗といひ、無口のうちに現るゝ氣立といひ、さても尋常の人には出来ぬ事と、互の心に首肯き



合うたる母子の物語、折しも柱時計を見れば、まだ宵と思ひの外に九時を過ぎぬ、

「ねえお春や、今のうち二階の寐床を取って置いておあけよ、机の前に觸らないやう、また歸つて来て御勉強なさるかも知れないから」だつて、おツ母さん、そんな事を仕て置くと却つて嫌な顔をなさるよ、あの吉田さんは『いくら何と仰しやつても、さう仕て置くもんだよ、ああいふ方には吐られても和女、するだけの事を仕て置けば、きつと身の爲になるからさ、他人の事ぢやアないよ』それでは、もし何とか仰しやれば、おツ母さんだといひますよ、ホ、ホ、宜いとも、しかし遅い事ね、今朝お出かけには夕方までに歸ると、聞いたにねえ』おや、あの登音は吉田さんですよ、あれ、憎らしい、違つたこと、まア何處を歩いてなさるんでせう一日もかゝつて』そりやア和女、御用の都合さ、あの通り少しも平生に出ない方だから、どうせ出れば一日ぐらゐる』何の御用なんでせう、同じ家に居てさへ黙つて物を仰し

やらない方が、わざ／＼出歩いて朝から晩まで』ホ、ホ、ホ、何の御用か分るもんかね、何し

い事をいふ子だよ、いつまで小兒のやうに、ホ、ホ、ホ、折しも登音さへなく歸り來りて、靜に門の戸を引き開けし吉田雄藏、みれば半面まっ白に縋帯を施して、右の片目ばかり輝くばかりに光りしのみか、顔色は青く衣服は引き裂かれて、しかも例の潔癖とて肌著に白地の浴衣を放さねば、その襟の邊に際立つ血汐の痕、なま／＼しき體を見るより母子もろとも一時に驚いて、あつと呆れぬ、

『いや、心配して下さるに及ばんです、つい途中でつまらない怪我をしたもんだから、幸ひ近處の醫者へ駆け込んで、うまく遣つて貰ひましたよ、どうか氣の毒ですがね、鐵瓶に湯を入れて鹽か梅干と一所に持つて來て下さいな』いひつゝ其まゝ脇目も觸らず靜に二階へ上り行きぬ、



一目ちらと見てさへ尋常の疵とも思はぬに、ましてランプの火に照り返されし一入の物凄さ、母子は言葉もなく顔見合はせて呆れしが、流石に年甲斐の母親まづ鐵瓶を提げて娘は梅干と焼鹽を盆に載せつゝ、うち震ふ足下踏み占めながら二階へ上り見れば、吉田雄藏、机に片臑を凭たせ片手に頭を押へたるまゝ黙然と坐しぬ、

「まア貴君、吉田さん、どうなさいましたの」なアに、大した事はありませんがね、ちよいと疵が頭の方へかよつたもんだから、少々ばかり熱が出たやうですよ、しかしそれも症の知れたこつて、たゞ一時の堪忍さへすりやア別段、兎も角その湯に鹽を入れて下さい、何だか咽喉が乾いて、や、また寐床を展べて貰つたな」あれ、何ですよ吉田さん、そんな中で、つまらない事を、さアお春、お茶碗へ和女その湯と焼鹽を、して貴君お疵は全體どういふ工合です、また何處で、どうなすつて、お顔の色も悪う御坐いますよ、第一お著物が、血も黴いて

居りますから召し替へないといけません、これ利女その押入を開けてさ、えゝ氣の利かない子だねエ』いや／＼、さう仕て貰はなくつても宜しいがね、疵は七針ばかり縫ひましたよ、無論、浅い事は幸ひ浅いですが『おや、七針、そりやア貴君、いくら浅くつても大變な疵ですよ、まアどういふ理由で、そんな疵を』それが女主人、如何にも不思議だ、いろ／＼考へて見ても變だ、元來こんな事は過ぎ去つた後の祭禮で、言つたところが役には立たないがね、先刻、ちやうど日暮前、あの根津の権現横町まで歸つて來ると四五人の壯士らしい書生が、どや／＼と一時に現れて、つまり中にナイフでも持つて居た奴があつたらう、醫者の鑑定でも何か鋭利な刃の薄い小いもんで、すつと來たのが幸ひ頭の毛の上から迂り加減に斬れたから宜かつたが、もし直接に手徹のある皮膚の上だつたら、それこそ大變ださうだ、しかし素性の知れない奴に理由も分らず大切の頭を遣られたのが残念だ、これまで人に怨恨を



買った覺のない身體ですからねエ、猶更ら以て心外だ」きくや否、はつと母子おもはず俄に顔見合はして、何とやら電氣にうたれたるが如き體、「お春や和女、ちよいと階下へ降りて居な、用があつたら呼ぶから、そして火鉢の火も絶さないやうに、お湯も澤山、沸かして置くんだよ、はやく門戸も閉めて仕舞って」

眉うち擧めて思案顔に降り行く娘の姿を見返りながら、おもはず膝を進めつゝ聲を潜めて、吉田さん、事に依ると、妾どもが何とも申譯のない理由になるかも知れませんよ、その相手の顔を御存じ御坐いませんでしたか『いや、最初かよつた奴はステッキを持った色の小黒い背の低い肥つた書生だから、確乎に覺えてるが何分、背後へ一時に折り重つて来た三四人は顔を見る寸隙もなかつたさ、しかし女主人、申譯のない理由とは全體どういふ理由だね』『いえ別段、これといふ極つた的も何も、ある理由では御坐いませんがね、實は過日、づうづ

うしく押し掛けて来て、母子が困りきりました、そら、貴君が借金取と間違へた、あの女、ありやア娘が小石川に奉公して居りました家の親類とかで井出といふ人なんです、また娘が急に暇を取りましたのも原因は其、井出さんが薄氣味わるく何だか妙に附き纏つて、それがため遁けて歸りましたやうな理由で、過日、こよへ来たのも、やはり娘の事で、いや花見に連れて行くから貸せの、どうのツて、それはく貴君、うるさい事でね、その貴君、井出といふ人が今朝また、まゐりましたの、ところが妾は勿論の事、娘も御承知の通り、あといふ我まよな一本調子ですから、随分とね貴君、なるほど男としては居堪まらないほど、酷く、あとに念の残らないやう猶更ら酷い事を申しましたので、よほど怒つた様子に見えました、その中に一言、貴君の事を妙に考へ違ひ仕たもンか、ホ、ホ、ホ、が妾どもの申譯ないことツて、あの二階の、まア此邊は吉田さん平に御免を願ひますが、あの二階の増は居るかと貴



君、唐突に、とんでもない事を、只それだけならば宜う御坐いますが、もはや自暴になつて  
貴君の事を、まるで目の仇敵に取つたもんですから、娘は半泣きのやうに口惜しがつて、ま  
た妾も黙つては居られませず、母子でつい、餘計な口敷をききましたのが、もしや萬々一、  
勿論あんな柔弱けた本人が手を下さず咎は御坐いますまいが、随分、いろんない書生に取  
巻かれて吉原などへ行く人ださうですから、只今お談話を承つて、はつと胸に、第一、貴  
君が他人に怨恨をおうけなさるやうな方でなしと思ひまして、猶更、もしこれが外れない理  
由にでもなれば、何とお謝罪を申して宜いやら、兎も角、吉田さん、恐れ入りますが警察  
へ一應お届けなすつた方が、まだで御坐いますか」

吉田雄藏、差俯いたるまゝ黙然として聞き居たりしが、組んだる兩手を膝に落すや否、しづ  
かに頭をあけて閉ぢたる兩眼を開きながら、總身の溜息ほつと吐きぬ、「なるほど、談話の  
順序は能く分りました、しかし相手を必ず其人と斷定する事は出来ませんから、まア自分の  
災難と諦めますさ、また直に警察へ訴へて出る事も氣の付かないぢやアなかつたですがね、  
相手は遁けて仕舞つたし夕暮前ではあり、第一この疵は淺いにしろ外と違つて頭といふ一點  
に、まづ何よりも醫者へ駆け込みましたのさ、よし訴へて相手を出したところが、彼等に刑  
を與へるよりも多少前途の事を考へる此方に嫌な事があるから、まア此まゝで置きませう、  
疵は凡そ一週間で宜いさうですよ、しかし其、井出といふ男、けしからん奴ですな、小石川  
の何處です』はい、春が奉公いたして居りましたのは小石川の原町で、雀部といふのですが、  
井出といふ人は其、奥さんの甥に當るんださうで御坐います』はよア、なるほど、しかし出  
來た事は仕方がない、これに就いて心配は無用ですぜ、強ち其人と極つた理由でないから、  
なほ以ての事』でも貴君、それでは、あんまり御人品すぎて』いや、われくゝに人品も何も



あつたもんでない、たゞ利害の數に於て、此まゝ黙ツてるのです』しかし、妾どもの氣が濟まないのみならず、どうも貴君に對して、申譯が御坐いませんもの』女主人、いつまで言ツても同じこつた、もう寝ますからね』おや、妾とした事が、とんでもない、うっかり仕て、嘸お辛う御坐いませう、さアどうか、只今すぐ蒲團を、いえ貴君、上は兎も角、かういふ時に下へ澤山あつく敷かないと不可よ、そして御用が御坐いましたら御遠慮なく、お手を鳴らして下さいませよ、母子のうち一人は貴君きつと起きて居りますから』さう大層に仕て貰つちやア困る、却つて困る』大層も小うも御坐いますもンか、よく貴君ア困るくくと仰しやるよ、せめて御養生の間だけでも母子を下女に思つて下さらないと此方が困ります、兎も角、ちよいと階下へ、すぐまた上ツて御用を伺ひますから』

其まゝ階下に降りむとすれば、立ちながら梯子段に身を倚せて耳を欬てし娘の春、はつと驚

いて飛び退きしが、火鉢の前に坐したる母親の顔、しげく打守りて聲を潜めつとはや眼に持つ一滴の雫、『ねエ、おツ母さん、妾、どう仕ませう』とんだ事になつたねエ、しかし憎い奴だよ、きつと彼奴に違ひないとして見れば、お春や和女も母も、吉田さんに申譯がないよ、それでも御覽、あの人品で心が大きくつて、あきらめの男らしい立派な事』ほんたうですなエ、どうして、まア、あんな氣になれるんでせう』そりやツ和女、大體に人間の出來が違ツてるんだよ』さう考へると、猶更ら彼奴が憎らしいよ、どうか仕てやりたい事ねエ、もし妾が男なら、きつと復仇を取るんだが、口惜しいツてば』その口惜しいだけを和女、吉田さんに盡さなければならぬよ、お春や、こゝは和女の盡し時だよ、あの疵の癒るまでは夜の目も寝ないくらゐに介抱してあけて、なるほど彼女はと、思はれるのが母への孝行だよ、第一また和女のためだよ、うっかり仕ちやア不可よ、宜いかね』だツて、おツ母さん、わざく



そんな事すると、また却つて悪いよ、あゝいふ方だから『黙つて母のいふ通りに和女お仕つてば、強情な子だねエ』あれ、お母さん大きな聲で、お二階へ聞えますよ『和女が聞えさすんでないかね、わからない』わかつて居ますよ、ホ、ホ、ホ、『これ、笑ふといふ事があるかね、こんな時に』

其 八

うまれて十四の年まで削るが如き山の嶺を飛び廻り穿てる如き谷の底を跳ね廻つて、都人士の眼には輕業師と等しき境涯に育ちしかど、身體髮膚いまだ會て卵の毛の疵も負はざりし我、里に出で、風車の如く追ひ使はれし三年の艱難辛苦にも生爪一枚を剥がせしことなく、この東京に來りてよりは猶更の我、苦學十年の間を愚の如く守つて前後一千人の學友にも無用の交際なければ戯れに拳の影さへ受けし事なき我、そもく二十六の曉に素性も得知れぬ奴の

亂打亂撃を蒙りしのみか、一身を一國として帝王の居座ともいふべき頭に三寸の斬疵を付けられしとは何たる事ぞ、

しかし其相手は確實なる證據なけれど、由來の我心に問うて一點の覺なく現在この母子に聞いて何とやら闇中に物を掴みし心地、よし敵は正しく其者ならずとも、其者また必ず我敵となるべきを思へば、あゝ去るべし去るべし、既に去らむと欲して三度も去り得ざりし我は竟に斯くの恥辱を受けたり、咄この薄志弱行の奴め何のために今日まで去り得ざりしか、此後さらに頭を割られても四里四方の大都會この六疊一室の外に我身を置くべきところなきかと、吉田雄藏おもはず人知れぬ枕を敬てよ我みづから我を嘲りぬ、

されど母子が我に對うて其身が罪を犯せしが如く、また我この疵を九死一生の大事に等しく驚いて、夜の眼も寢ずに涙片手の介抱、さらに血を分けし肉親も及ばぬほどの芳情を思へば、



その驚愕を冷かに笑ひ其芳情を俄に捨て今このまゝに立去らむ事また忍び難し

やうく間に一日を置いて三日目の朝、その疵の疼痛はなけれど其疵のために發せし前夜の熱に疲れて、とろくとせし曉の一睡なほ未だ覺めやらぬ八時ごろ、例の上田力、山の如き兩肩を動かして座禪前の達磨に等しく訪ひ來りぬ、「たのみます、吉田は居りますかな」折しも娘と共に掛替の繻帶を巻き直せし母親そのまゝ立出で、一度さへ逢へば忘れぬ筈の上田が面體、みるや否、「おや、よく入らツしやいました、どうか此方へ」やア女主人、過日は失敬々々、また猪猿の相手が來ましたよ、ハ、ハ、ハ、吉田は居りませうな「いえ、あの節は妾こそ、はい、吉田さんは、お在で御坐いますが、貴君、とんでもない御災難で、大變な、お怪我をなさいましたね」何、大變な怪我を仕た、全體どどうして、どんな怪我だ

「まア貴君、ちよいと、お待ち下さいまし、只今、すやくお寢みになつてる筈で御坐いますから、お春や和女、そツと見ておいで」

二階へ上りのゆくの娘の後姿、じろりと見上げながら、音太き聲を潜めて、「女主人、どういふ怪我だね」それが貴君、お氣の毒で、つまらない奴に少々お斬られなさいまして「人に斬られたア、吉田が、むよ」くわツと見開きし大眼球、夜著の袖口に等しき唇端を結んで、娘が降り來るも待たず其まゝ身を起し、のそくと二階へ上りのゆきぬ、

山の如き大兵、ぬツと無言に現せば、はツと驚いて思はず枕頭を立去るお春の聲に、やうく眼を覺せし吉田よりも上田の眼中まづお春を睨み降して、其まゝ枕頭に入り替りつと半面の繻帶を差覗きぬ、「おい吉田、どうした、兎に角、シツかり仕ろ」

吉田雄藏、おもはず枕を敬て、其まゝといふ上田の言葉を耳にも入れず、夜具の上に



坐しぬ、『ハ、ハ、ハ、馬鹿な目に逢ひましたよ、しかし僅少の疵です、たゞ頭の方で縋帯が大業だから、酷く見えますが何、大した事はない筈です、つまり摺疵も同然で』疵の大小は俵置き、人に斬られたといふぢやアないか、全體どういふ奴だ、相手は、階下の女主人に聞かなかつたですか、何たゞ、つまらない奴に災難で斬られたと聞いたばかりだが、君は現に相手の面も見て、また多少の胸に當る事はあるだらう』ところが、いかにも馬鹿けたこつて、殆ど夢のやうな理由です、つまり一昨日の夕方、貴兄と柳島の不在を訪うて、根津の権現横町まで来ると、不意に四五人の壯士めいた奴等が現れて、無言のまゝの鐵拳雨下といふ始末、その中にナイフでも持つて居た奴があつたと見えて、左の頭から額口へ三寸ばかり、しかし浅かつたのは不幸中の幸で、どう考へて見ても思ひ當る事はなし、まづ人違ひの災難と諦めて居ますさ』や、けしからん奴どもだな、實に残念だな、そんな奴原に、もし乃公が居つた

ら畜生、壯士も絲瓜もあつたもんでない、いちく捻り飛ばして脛も腰も、ふん抜いてやるんだつたに、しかし吉田、いくら考へても思ひ當る事はないかね、全くの人違ひかね、いくら不意だつて君も山國に育つた産物だ、せめて一人ぐらゐ取つて押へて生證據を残しやア宜かつたに、惜しい事をしたな、何か其場に敵の目印になるやうな物でも落ちてなかつたかな、いかにも乃公が居りたかつたよ』なるほど、貴兄が居つたら面白かつたでせう、しかし僕も随分、やりましたさ、外貌よりも激しく遣つたから奴等も遁け散つた理由で、もしステッキか何か得物がありやア吉田雄藏これでも山男です、たしかに一人や二人は其場に叩き倒したでせうよ、實ア後で兩手の指の股に頭の毛が、よほど搦んで居ましたからなア、ところで此事は柳島へ黙つて居て下さい、疵が癒つて後、どうせ談話を仕ますから、また貴兄のところへも知らさない心算で居ましたのさ、ちやうど明日、疵口の絲を抜き取るさうで、何、も



う、すぐですよ』むよなるほど、人違ひといやア仕方もないが、仕方がないといふだけ猶更ら残念で、憎むべき奴等だ、時に君、今日こよへ来たのは外でもない、もし例の博士へ再び寄宿する都合にならないやうな事なら、當分まづ僕の家へでも寢泊した方が宜からうと思つて相談かたぐ、しかし、さういふ疵の出来た以上、まア癒るまで此家に居るさ』こりやア妙です、實ア僕も、その邊の事に付いて一昨日、貴兄へ相談に、ところが柳島も其日は不在で、歸途に斯ういふ始末、無論、疵の癒り次第、すぐ轉じる決心です』それく、それが宜い、流石ア君だ、それに限る、人の行路に於て最も恐るべきものは、外見に現るよ三寸や四寸の斬疵よりも、その痕跡なくして其皮肉に喰ひ入らるよ大疵だ、鐵腸男兒また其腸を喰ひ取らるよ凡例は随分、世の中にあるこつたからなア』ハ、ハ、ハ、ハ、蓬髮垢面ともいふべき一介の貧乏書生、喰ひ入らるよ皮肉も腸も、まだ整はないから寧ろ却つて其、恐れもないや

うな理由ですがね、兎に角こよは去りませう、去るに如かず、ハ、ハ、ハ、ハ、その恐れがあつても無くつても去る方が宜い、あんまり此家の女主人が如才なさ過ぎるやうだ、第一あの娘が不可、あいつ聊か小面が美人系を帯びてるからねエ、全體ありやア君、僕が始めて此家へ来た時、君と同伴に出がけの門口で逢つたんだらう、その時の君が説に曰く、小石川の屋敷奉公してると聞いたが始めて見たと、ぢやア君、あの時に始めて見て爾來そのまゝ家に居るんだな、不可、大に不可、木は靜ならむと欲すれど風これを動かすの理で、いかな大木も竟には根の弛まざるを得ずだ、僕の如き野暮漢と雖も局外より一瞥して、その不言の刹那間に一種いふべからざる不穩の狀を看取す、あゝ君、去るべしだよ、しかし疵の癒るまで動いちやア却つて宜しくない、只その決心さへありやア結構だ』ハ、ハ、ハ、ハ、さう變に感じられても困りますかね』いや、感じ了つた理由でない、また將に感ぜむとする理由でもない、今や感じ



つよあるんだから、この愚物鈍物、君がため俄に意外の機敏になつた邊を君、わるく取ツちやア不可ぜ』

折しも階下より女主が片手に茶盆を携へ片手に鐵瓶を提げて上り來りつ、續いて赤き袖口より雪を欺く眞白の手首そツと差出せし菓子を受取りつよ、『まことに遅くなりまして、つい貴君お湯が、冷めて居りましたもんですから、さアどうか、召上つていたときたう御坐います、時に吉田さんは此度、とんだ御災難で』なアに出來た事ア仕方がないです、しかし、いろいろ御厄介でせう』どう致しまして貴君、少しも行き届きませんので、わけて此事に付きましては、妾ども母子が如何ほど御介抱申し上げて、實は濟まないやうな理由が御坐いますもんですから』

きくや否、吉田雄藏おもはず膝を叩いて目配せすれば、女主も俄に心付いたる體、はツと言

葉を差止めしに、上田は例の大眼球ぐるぐると廻して、『おい吉田、その疵さへ癒りやア、なるべく後は身體を大事にセンと不可ね、その上また、どういふ場合で、いつ何時どんな災難をうけるかも知れないから、古い文句だが君子それ危きに近よらずさ、ねエ女主人、遣り損ツて仕舞ツちやア、氣が付いても無効なもんさ、ハ、、、』

其九

さらぬだに我みづから我を促しつよ、今は只この疵の癒ゆるを待つのみ事、癒えなば直に此家を去らむと思ふ折しも、上田が訪ひ來て餘所ながら語りし言葉の端々、かの大風の吹くが如き眼にさへ母子が情の露の溢れて見ゆるかと思へば、猶更一日も早く去りたし、疵口を縫ひし糸も無事に抜き取りて、その間の熱さへ三十八度六七分が一時の頂上、まして元來の人に過ぎたる健全どこに何の支障もなく、いよく明日は此家の名残、同じうは



のものゝ感情も害せざるやう、我また後に言葉の種を残して思はぬ花の芽を吹願はくば愛情の神よ暫く雙方の念頭に宿り給ふなと、人知れぬ今宵の枕を叩いて種のを惱ましぬ、

流石に何とやら寝られぬまよの終夜、枕頭にランプを引き寄せて書を読みつゝ、

の柱時計いとど冴えて二時をうちし折しも、俄に立騒ぐ人聲物音、耳を澄せば遠くすゞしめ

一町か半町のうち次第に高く手に取る如く、やがて火事だ火事だと叫ぶ聲もろとも、すり半

鐘は睡れる空を破つて枕を劈くばかりに響き渡りぬ、

されど物に慌てゝ騒がぬ天性、はつと驚いて岸破とも跳ね起きず、読みかけし書籍のページ

数を見覚えてランプを片寄せし後、静に起き出でつゝ窓を開けば、はや既に闇を貫きし一天

の紅、飛び来る火の粉は急雨の如く軒をかすめて、火炎を包める黒烟は正しく眼前の團子

阪より千駄木の方面、首突き出さば忽ち半面を焼かむばかりの近さに、さすがの吉田雄藏も始めて驚きぬ、

折しも階下より女主の聲、『おや吉田さん火事ですよ、すり半鐘ですよ』いひつゝ寝衣のまよ

に襟かき合はして上り来りしが、開ける窓の外に火の粉の飛ぶを見るや否、おもはず走せ寄

つて身を軒下の戸際に差伸ばしつゝ、また忽ち振り返つて聲さへ平生に變りぬ、『こりやア吉

田さん大變ですよ、つい貴君そこですもの、しかも火が大きくつて、お春や、お春や、さア起

きるんだよ、吉田さん萬一の用意で御坐いますから貴君、大事の物だけは今のうち『いや僕

に大事の物も何もありませんが、もし御心配なら手傳ひますぜ』いえ／＼まア貴君は貴君の

物だけ』いひ捨てゝ其まよ二階を駆け降りし時に、もはや近處合壁も一時に立騒ぎぬ、

もし萬一の事ありとも、吉田雄藏が第一の大切は其身一貫、多年の苦學慘憺、砂中の黄金を



拾ひ集めし如く自ら筆記せるもの第二、第三の版行書籍は積んで山の如きも時に取って反故に等しと、まづ筆記ものを一風呂敷に包んで机の上に置きしまよ、かけ降りて見れば、母子もろとも十三の弟を相手に箆筒の衣類を引き出し手道具を持ち運ばむとする體、「女主人、さう氣を揉んで慌てるに及ばない、いざといふ時に出すもんだけの用意さへ仕て置けば宜しいよ、さアとなれば僕が働くから、しかし兎も角、どんな工合か火事場の様子を見て來ませう提灯があれば貸して下さい、巡查が喧しくして無提灯ぢやア逆も近寄れないから」どうして吉田さん危う御坐いますよ、第一まだ貴君お疵が癒つたばかりで「大丈夫、さう危険なところまで行きもせず實際また行かれない、たゞ消防線の此方で様子を見るばかりです、その様子次第で直に引ッ返して道具を持ち出しますから、お春さん提灯だ〜」あれ吉田さん、いけませんよ、またお怪我をなさると「ハ、ハ、ハ、さう度々怪我をして堪るもんか、さア提灯

を、だつて貴方いけませんよ、ねエおツ母さん、もし往らッしやるなら提灯なしで見られるところから御覽なさい、出しませんよ提灯は「眞實ですよ吉田さん、つい貴君その辻から」

「ぢやア兎も角、その辻まで往つて見よう」

門口を飛び出せば、こゝにも織るが如くに叫んで馳せ違ふのみか、半町ばかりの辻には火の粉を浴びて黒山の如き人浪、一天を焦せる猛火は次第に高く左右に擴がりつよ、はや二三十軒も焼き盡せしとの噂に違はず、風なけれど自然に風を呼んで焔々たる火の手の勢ひ今は何處まで伸びむかと思はるゝ體に、吉田雄藏そのまゝ取つて返して走せ入らむとする折しも、向側の塀際に停んで往來ふ人の頭上に伸び上りつゝ頻りに我二階を打仰ける三四人の書生、ふと何心なく見れば、ほつと灯影に照り返されて赤鬼の如く、その中の一人は正しく根津の権現横町にて我に突き當りし最初の奴、さては此奴、いよく例の餌を喰ひし犬馬に極つたり、



しかも今この火事場の方角を幸ひ斯くまで素早く馳せ込で、この雑沓混亂に乗じつゝ猶も  
だ我を覘ふとは言語道斷の奴原、おのれ山男が覺悟せし上の鬪力を知らざるかと、おもはず  
拳を握ッて力足を踏み止めしが、また俄に思ひ直して其まゝ走せ入りぬ、  
待ち兼ねし母子もろとも出で迎へて前後に取縮るが如く、「どうで御坐います吉田さん、逆も  
無効ですが、よほど火の手が大きいでせうね、お隣屋でも貴君そろく用意をなさいますよ」  
『いや、なか／＼火の勢威は盛て急に消えさうもないが、まだ狼狽へるに及ばない、第一この通  
り風もないから、あの辻で喰ひ止めるだらう、しかし消防夫が辻の角家を取崩すやうな騒動  
になると最早や用意專一だ、まづそれまでは安心してゐるが宜からう、しかし案外の大火事で  
大變な人出だ』おや、さうで御坐いますか、それで少しは安堵いたしました、ねえお春、一  
時は全然どう仕ようかと思つたねえ』おッ母さん、妾まだ胸に動悸が打ッて居ますよ、怖い

けれど、また見たい事ね、ちよいと、お二階へ』や、お春さん、止すが宜い、この門口にも  
人が大變だ、そこへ若い女が首を出して餘所の災難を見るもんでない、それより萬一の時お化  
粧道具の一個も忘れないやう今から始末して置く方が宜しいよねえ、女主人、ハ、ハ、ハ、ハ、  
『眞實だよ和女、こんな中でも吉田さんが和女のためを思つて下さるんだから、うかくする  
と罰が當るよ、しかし貴君お化粧道具も何もありやアしませんよ、母子三人の衣類ぐらゐる名  
々の身に纏ッて出られる身代ですから、ホ、ハ、ハ、ハ、』いや、何にしても萬一の時は表より裏  
へ運び出ませう、往來は却ッて人で混雜だ、裏口の竹垣あんなものを押し倒すのは雜作も  
ないから、裏の空地へ持ち出して、あの路次を横町へ出る方が宜い、そして弟さんを中間  
に挟んで三人とも順に放れないやうせんと不可、僕は男だから事に依ると表へ出る覺悟だ、  
風呂敷包みは宜いが、まさか其葛籠なんか荷いで、あの路次は通れまい、ところで女主人、



何か丈夫な杖のやうなものはありませんかね、人混の中を割って通るに握り拳ぢやア道が開けないから、また一事は重荷の力にもなるから『まア貴君さう仕ていたどかなくつても、どうか妾どもと御同伴に』さうですよ、おツ母さん、少しの物は焼けても宜いから、やはり御同伴に、ねエ』ぢやア兎も角、それは其時の場合として置いて、今いうた杖のやうなものはありませんかな』さやうですね、何も御坐いませんが、あの裏口の戸の心張棒にしてる三尺ばかりの細い鐵の棒では重過ぎていきますまいね、ありやアこの横の壁が九尺の半格子になつて居た時の中央に使つた柱がはりで『そりやア妙だ、それで宜しい、何、只ほんの人に押されないための用心だから、却つて細い目立たない重いもんに限る、どりや、ちよいと持つて来て見ませう』裏口の戸際より持ち來つて一振り二振り、空を切つて右手に打振りながら、おもはず力足を踏み占めて、片頬の微笑、平生は温順篤厚の君子然たる吉田雄藏も、むら

くと湧き出づる心頭の憤怒に眉を逆立てつと、山家生育の本領を現しぬ、『これで宜し、これで宜し、正に是れ佛者護身の利劍と一般、觸ると觸れざるは彼の善惡邪正にあり、ハ、ハ、

そつと其まゝ二階に上りゆきつと、ランプの火を吹き消して薄闇黒の中より、窓外は一面の白晝に等しき向側の塀際を見下せば、これほどの近火雑沓にも似ぬ餘りの静けさに覘ひし的を失ひしためか、さても惡運強し、狗鼠の奴原いつしか去つて影なし、

また首突き出して見渡せば、さしも焰々たりし猛火の勢ひ次第に衰へて、今は鳴り響きつと燃え盛る黒煙もなく、たゞ薄紅の低き火中より音なく白煙を吐くのみ、折しも東の空やうく白みがよりぬ、



敵は去つたり夜は明けたり火は消えたり、もし一步を誤れば忽ち現じ出す一個の山間兒、敵を倒し夜を冒し炎を踏んで、いづれか其間に幾何の其人を失ふべき吉田雄藏、また幸ひにして平生の黙々たる讀書生とぞなりぬ、

されど猶いまだ去らず明けす消えざるものあり、よし自己の身は猛然と去つて消ゆるの勇ありとも、人知れぬ心の闇の明け放れゆく空に拭ふが如く一點の雲を残さざるや否、これを知るものは只それ愛の神か魔の神か、

包みし縷帯を取れば毛を割つて左の額口に痕を残せし三寸の斬疵、そもくこれを人生行路の何とか見る、この疵の滅せざるかぎりには吉田雄藏いかに山間兒たるも都の露の運ぶ情は脱れず、この疵の滅せざるかぎりには吉田雄藏いかに君士人たるも曉の枕に思ふ心は忘れず、

おもへば思へば外の敵にうけたる怨恨の痕は正しく曲物の諺、おそろしや戀は木像の腸に宿りぬ、

山に育ち里に艱み都に苦しみて、數ふれば前後こよに十三年の星霜、今や二十六の曉、人にも世にも勝れし宿志を抱いて脇目も觸らざりし天晴の男も、あはれ三寸の疵に五尺の身を縮めて暫し浮世の草枕、いかなる夢を白髪の後に笑ひ種とぞする、ゆくての空は雲霞、また曇りて雨とやならむ、また晴れ渡りて風とやならむ、



吉田雄藏後編

其一

四書五經が治國平天下の基となりし昔は、人間まづ苦學十年を以て生涯の梢に花も咲き實も結ばば、宿昔青雲の志こよに達して、きのふの襤褸は忽ち今日の錦に著飾れど、到るところ識者と學者が秋の夕の草叢に啼く蟲の如き今は、十年の苦學そのまゝ直に浮世の賣物とはならず、まして猶更ら下宿屋の窓よりステッキを振り廻して立身出世の一足飛びは叶はず、やうく山を見當てと掘り出したる礦物に等しく、たどの土でも石でもないだけの證據、またこれを社會といふ大坩堝に投じて吹き分けられ、其うちに多少の金を含むか銀を含むか銅か鐵か、

加之も生れ故郷の山にさへ居れば、其まよの土でも石でも濟むべきに、覺束なき鑑定の礦物となつて、わざと四方より此東京の大坩堝へ轉け出すもの年々幾萬個、これを吹き分けて金銀は俵置き、せめて銅か鐵でもあらば兎も角、分析溶解の結果、一文の價値なき金糞となつて灰の如く吹き出さるゝものさへあり、

天下の書生いづれも礦物として、この大坩堝に溶解せられし結果、その半は徒らに無用の金糞となり、残る半の二分は幸ひに學問の切賣して銅臭を逐ひ、その二分は鐵面皮に世の中を押し歩いて衣食の道を求め、餘すところ一分の過半を銀とすれば、果して金色燦爛たるもの幾何ぞ、

まして油斷のならぬ世の中、その金銀に質物あり鉛入りあり鍍金あり、甚だしきは人造金といへる近來の喰はせものあり、さるをダイヤモンドやプラチナも同じ山より出るものとは、な



るほど御道理なれど、蛤の吐く蟹氣樓を抵當に金借るが如く、元來の脈が違へり、

その鑛物ごろくと五個、都會の片端を流るゝ隅田川の邊、汐入村の月もる宿より次第に轉け出して、前後それく浮世の大焔爐に吹き分けられし後を見れば、流石に多年の空腹を抱へし苦學難行の曉、徒らに金糞となつて吹き出さるゝものはなけれど、偕いまだダイヤモンドも出でずプラチナも見當らず、たゞ確乎に多少の黄金を含める川上三吉あり、正しく銀塊となりし倉橋幸藏あり、どこまでも質朴なる銅の如く頑として鐵の如き上田力あり、かの黒田健次のみは此奴そもく鉛か錫かトタンかブリキか、但しはアンチモニーか、自己は赤銅の如く臙銀の如き滋味ありといへど實は正體の分らぬ怪しい男、以上四人の最後に出でし年少の吉田雄藏こそ、啞に似たる山出しの初心者ながら脇目も觸らぬ一意専心に學意を卒へし

結果は議論百出の才子才物よりも遙に優りて、加之も鑛物のまゝ猶いまだ焔爐に入らず、著々たる一步また一步の前途に我みづから我を磨きあけて如何なる光輝を放つべきか、

人事一切こゝに資本的の今日、苦學十年たゞ氣を以て勝ちし才力の効果は、憐むべし、白癡が午睡の放屁一發に加かすとして、可憐半生の學識を自然著の如く故山の巖陰に埋めながら、猪猿を相手の獵夫に生涯を終らむとせしが、忽然また山を出で、再び都門の風塵に後の半生を賭しつゝ、果は思はぬ奇縁の戀壻となりし川上三吉さても其後の一轉、さらに大煩惱の大俗物と化して人知れぬ風穴より猛火を吹くが如く、恐るべき賭博公開の説を事實の上に行はむとする奇才横溢の激變、如何に其出處進退を目撃せる年少の吉田雄藏をして得るところあらしめしか、



また倉橋幸藏が謹直嚴肅にして黙々たる態度と周到緻密にして孜孜たる匪勉力の結果、一度は筆を執つて都下を震動せし有数の新聞記者となり、一度は名を没して官海に於ける前途の多望者となり、加之も其間に無用の交際を絶ち朝夕の衣食を節して三年讀書の料を貯へつ、さらに身は一介の書生となりし折しも、たましく時の大臣に惜しまれ其令嬢に思はれながら猶かつ大器晩成を期して眼前の榮華に安んぜず、けに始めは處女の如く後は脱兎の如く、たゞ一片の約束を萬金に換へ心の情契を埠頭の煤煙に残せしまよ飄然と去つて海外に飛び行きし其人の本領、如何に資性の相似たる吉田雄藏をして闇々裡に學ぶところあらしめしか、また例の黒田健次が物を抛け出す如き大膽不敵にして、浮世を鼻唄まじりに絲瓜の皮とも心得ざる無頓著の結果、常に人生の軌道を踏み割つて闇雲飛乗の一藝を仕損じながら、諺にいふ蛙面馬耳郎、いよく平氣の面體を振り上げて自己一流の刷毛先に反故張りの大山を築

かむとし、勃々たる野心の頭腦ますく、餽細工の如く膨らして甘く軽く我まよ三昧の世を渡らむとする果は、何事ぞ、身に過ぎたる可憐の貞女を苦勞の仕死に弄り殺せしのみか、竟に待合の亭主となつて社會の闇黒面に泥水を呑む境涯、如何に初心の吉田雄藏をして自暴自棄の墮落を恐れしめしか、

また五尺八寸二十貫目の大兵は玲瓏たる珠玉をもて作れるかと思はれ、天生の單純潔白、自然の無色透明、さらに一點の邪氣なく野心なく利慾の念なく華奢の望なく、加之も案外の滑稽洒落、をりく人の意表に飛び出して狼狽へし神の如く寢惚けし佛の如く、もし斯人を數百年前の片田舎に生れしめば正しく萬人の崇拜欣慕をうくべきに、たゞ憾むらくは數百年後の今日かくの世の中に生れて寸隙なき百鬼行列の都會住居せしむるのみか、わけて物の哀れは無残や無用の才子を持ちて偏に我愚を守りながら常に人間秋風の感に打たると上田力が境



涯、如何に吉田雄藏をして湧き出づる同情の涙脆き男とせしめしか、

人間そもく臍の緒を埋めしところに祖先傳來の遺産をうけて醉生夢死の生涯を送らば知らず、また母の胎内より現世の風に當りて産聲あけし元來の本性そのまゝ變化なきものとするれば知らず、もし人は境遇に育てられ歲月に作られ時に應じ事に従ひつゝ自然に化すべきものとすれば、吉田雄藏こゝに當年二十六の曉、地圖にさへなき豊後の山また山の奥なる因部の里の巖組を這ひ出せしは十四の春、これが國の都といふ佐伯の町の縁も情も薄き親類の端くれに奴僕に如く追ひ使はれて偷むが如く夜學に通ひしは九年、その家を飛び出して新に巢を立ちし隼の雲霞この東京に來りしは十七の夏、幸ひ馬にも踏まれず車にも曳かれず汐入村の苦學難行に伴うてより九年の星霜、加之も山出しの初心に以上いづれも一癖あるべき四

人の性行いちく刻むが如く我耳目に入りて、その出處進退また深く自然の師となり戒めとなりし吉田雄藏の一身、都下隨一の名ある法學校に優等第一の首座を占めて業を卒へし外、如何に得難き人生の活書を読み得たるか、

其二

喧嘩と火事が横に伸びて江戸の花と咲き誇りし昔は知らず、今の喧嘩は辻の交番所で一喝の下に埒明き、火事は水道のポンプで一瞬のうちに消ゆる世の中、その花よりも團子阪に燃え上りし前夜の火の手、あれほど凄じき勢ひに一天の闇を焦しながら、今朝みれば僅に七八軒の焼跡より白き煙の名残を止めて這ひ渡るのみ、もし四里四方の大世帯とすれば火鉢の灰神樂に等し、

されど犬の糞を踏み上つても人の山を築く東京の習慣、まして寢耳を破りし不意のスリ半鐘



に狼狽へながら、幸ひ無事に残つて今朝の道具を持ち込む奴が、却つて前夜の火事場よりも上を下への大騒動、加之も彌次馬といふ流連の見物その間に跳ね廻つて織るが如し、その團子阪に續きし千駄木の林町は、猶更ら風下の黒煙に吹き付けられて、飛び來る火の粉に軒を舐められしほどの混雜、わけて平生は萬事ひつそりと浮世の小格子を岡本かねといふ仕立物の手内職に繋ぎつゝ、四十後家の身に今年やうく十七の娘と十三の男の子を抱へし女世帯なれど、幸ひ六疊の空二階を貸せし吉田雄藏が力に助けられて、茶檜杓一本の紛失もなき今朝、ほつと胸を撫で下しぬ、

「やれく、まづ無事で宜かつた事ねエお春、しかし二階の吉田さんが昨夜から今朝へかけて、どれほど力になつて下すつたらう、いくら氣を揉んでも女手の母一人でさ、第一和女が其通りで、あの喜太郎がまだ十三の小兒だもの、どうも斯うも仕やうがないぢやアないかね」

「あら、おツ母さん、酷いこと、和女が其通りだつて、どの通りですの、妾だつて前夜は随分、一所懸命になつた決心ですよ」ホ、ホ、一所懸命になつて、あの通りの和女だから困るよ、うろく〜と自分のお化粧道具ばかり抱へ込んでさ、あといふ時こそ和女、しつかり仕ないと、吉田さんのやうな方は口でこそ仰しやらないが、すぐ心の中で無効な女だと、お思ひなされるよ」だつて、おツ母さん、あの騒動の中で吉田さんが、わざく〜妾に、お化粧道具の一個も忘れないやう仕ると、仰しやつたんですもの」さう仰しやつたつて、あといふ中で和女、好い氣になつて濟むもんかね、いくら何だつて十七にもなれば、少しは物の考量といふ事をするもんだよ、母の氣も知らないで出過ぎても困るが、また和女のやうに母の氣も知らないで暢氣に、ほんやり仕居られても困るよ、全體いつまで世話を焼かす子だらう」さう、いち〜おツ母さんのいふやうに、第一また妾には其處まで行き届いて、人様の氣に入るやう出



來ないもの『だから萬事に氣を付けて、確乎おしといふのさ、よく考へて御覽、あの吉田さんの、あの眞面目な、おとなしい方の大切な御顔へ、あよいふ濟まない不意の疵を付けたのも皆、原因は和女だよ』あら、おツ母さん』あらなもんかね、和女が小石川のお屋敷から急に下ツて來てさ、すると間もなく其お屋敷の御親類か何か知らないが、井出とかいふ嫌に當世めかした氣觸な人が唐突に、づうくしく押し掛けて來てさ、いくら女親でも始めて逢つた母の面前で和女を、まるで自分が召使ひも仕たか但し妾奉公でもさしたやうに、まアあの時の生意氣な嫌味ツたらしい、そして齒の浮くほど柔弱けて居ながら大風な事ツてば、もし死んだ和女のお父様が居たら黙ツて無事に歸す人ぢやアなかつたよ、おまけに吉田さんを變に履き違へた岡焼から、見當外れの自暴になつて、手下の悪書生に、あんな卑怯な事をさしたらしいよ、らしいぢやない、キツと其事に相違ないよ、それでなくツて吉田さんのやうな方

が他に怨恨を受ける筈があるもんかね、して見れば和女、お春や、和女どうしても吉田さんに濟まないだらう』ですから妾は、おツ母さん、あの井出といふ奴が憎らしくツて、それになくてさへ、彼奴が嫌さに、お屋敷を遁けて歸つたくらるだもの、その嫌な、すかない奴が、吉田さんの御顔へ疵を付けたかと思へば、猶更ら口惜しくツて、口惜しくツて、もし今度、途中で逢つたら喰ひ付いてやりますわ』ホ、ホ、馬鹿な子だよ、そんな出來も仕ない言を云ツてるから困るよ、しかし途中どころか、あよいふ厚顏しい恥も何も知らない猪鼻助は、また平氣で押し掛けて來るかも知れないから、この後は厄病神と一般で當らず觸らず、隠れるより外に仕方がないよ、もし來れば、すぐ二階へ駆け上ツて、おと二階といへば吉田さん、どうなすツたか、前夜からの御疲勞で寝て在らツしやるらしいが、兎も角お茶でも持つて、ちよいと和女』



やうく火事騒動の跡始末、まだ小道具の取散らせし中ながら、水入らずの母子が膝と膝との物語り、人知れぬ内證こつそりと聲を潜めて二階の梯子段を見上ぐる折しも、門口より不意に入り来りし人の足音、「甚だ突然ですが、お二階に吉田といふものが在りますか」母親まづ起つて障子を引き開ければ、軽く駱駝無地の烏打帽を戴きながら羽織も小袖も同じ大島紬、ぞろりと重く著流せし三十四五の男、「實は今お門を通りかゝつて、ふと二階の窓を見ると確乎、首を出して居たのが吉田雄藏かと思つて、私は黒田といふもんです、黒田健次と」慇懃の會釋を残しつゝ二階へ上りて見れば、疲れて睡りしかと思ひの外吉田雄藏、まだ前夜のまゝ解きもせぬ大風呂敷より一二冊の書物を引き摺り出しながら、半窓に片脰うちかけ柱壁に背を凭せて黙讀の體、「吉田さん只今、黒田さんと仰しやる方が見えましたよ」聞くや否、おもはず振り返りて眉を擡めぬ、

『黒田、むよ黒田』はい黒田、健次様と仰しやいましたよ』やア、來ましたかい、どうして此家を』つい通りがよりに、その窓から貴君を御覽なすつたとかで『女主人、そりやア僕の友達ですがね、や、よろしい、仕方がない、こゝへ上げて下さい』

『はア、この二階ですか、いや〜案内に及びません、どうせ一室でせう』はや既に一言一句の端さへ自己を現しながら、のツそりと梯子段を昇りて、ぬツと半身を差出せしは汐入村以來の難物、第一番に飛び出して浮世さんぐに搔き撈りし横紙破りの黒田健次、雨にも風にも變らぬ無頓著の平氣面に四邊かまはぬ無遠慮の高調子、『ハ、ハ、ハ、御意に召さない奴が來たぜ』

木に竹を繼ぎ合はしたるが如き不節調、愚の極と才の極と混き交ぜたるが如き不調和、大風の灰を吹くが如き散漫の性と螻蟻の睫毛を讀むが如き緻密の性と搗き交ぜたる不釣合、加之







長屋普請と違つて、なるほど木口は感心しないが何處か手丈夫の自前普請だ、加之も人の目に立たない浮世小路に出来た内證振だ、どうしてもペンキ塗の學校窓から飛び出した初心の探し出せる家ぢやアないぜ』はア、さう面倒な小理窟の付いた家ですかねエ、この二階を借りてから三月の餘になりますが、始めて承りましたな、ところで此家が吉田雄藏のため、どういふ工合に變です』おい君、吉田、今ちらと階下で見たぜ』何を何を御覽なすつたんです』ハ、ハ、恍けるない、無効だ、他は知らず黒田健次に向つて、何を御覽なすつたもないんだ、しかし豪い、天晴れ手柄だ、君としては猶更ら以て恐れ入つたよ、凄いいつた、ハ、ハ、岡本かねといふ女名前、ありやア正しく危ツ氣のない母親だらうが、十七八の娘、なかく美だな、ハツハツハ、』や、こりやア他の事と違つて黒田さん、けしからん事を、其、あの娘が、どうも甚だ』ハ、ハ、ハ、どうも甚だ其あの娘が、けしからん女だらうさ、

しかし君また甚だ、けしからないでもなかりさうだね、もし萬一、萬々一いまだ君の方で手固く野暮固く、けしからないにしろ、おい吉田、あの娘の方は既に大に内心、けしかつてるぜ、此お二階に吉田といふ人が居りますかと、不意に僕が這入つた時の彼が風情、おもはず母親の小影に身を縮めて何とやら物に襲はるゝが如く、さも恥かし氣の伏目勝に差俯いた一刹那の舉動、また僕が梯子段を昇りかけて振り返るや否、はつと見上げた顔を反けて的もなく遁けた後姿、以上いづれも事なき尋常の處女としては頗る形勢不穩の狀だ、つまり我知らず神經過敏の間に無言の説明を仕てるぜ、ハ、ハ、ハ、おやツ、おやく、君の額際に妙な疵が出来てるね、僕ア他の面を見ずに饒舌るから今まで氣が付かなかつたよ、むよ頭の毛の中からだな、まだ癒つて日が浅いやうだな、どうした、全體どう仕た傷痕だ、こよの家といひ、あの娘といひ、その疵といひ、由來の君と仕ちやア殆ど事實にあるべからざる不思議な



事ばかりだ、いよく變だ、事態なか／＼容易ならずだ、ますます怪しいぞ、何だか案外の仔細ありさうだな』

また例に依つて例の音を吹き出す咽喉と舌の作用、取るに足らざる相手として蓄音器を聴くが如く、たまく用なき耳の穴を貸せし吉田雄藏も、果は思はず癩癩に觸つて無言のまよの眉毛を動かしぬ、

されど平然たる平氣の横著面、自己また暫時の無言に四邊を見廻しながら、ふと背後を振り返れば、いつの間にやら階下より運び上げし茶盆と菓子のあるに、流石の男も聊か身内の痒き體、今更ら出過ぎし我口の端を捻りあけつゝ、また忽ち無遠慮の高笑ひ、

『ハ、ハ、ハ、どうせ御意に召さない奴が來たと、君には前口上の伏線を張つたが、さて階下の母子へ對して少々、きまりが宜しくないやうだな、あまり僕が無遠慮に饒舌つて居たから、

そつと黙つて置いて降りたんだらうよ、おい吉田、いくら後で僕を糞叩きに叩いても宜いぜ、君の都合の悪くはないやう何とか巧く辯解すべしだ、とんだ不意の厄介物が舞ひ込んで、折角けしかつた女を、けしかられないやうに仕ても氣の毒の至極だ、ハ、ハ、ハ、どりや歸らう、其うち自然また出喰はす機會があらう、だが君、おい吉田、人間そも／＼確乎たる衣食の道を得て世に立つまで、あまり嬉し過ぎた女運に叶つちやア不可ぜ、相手が可哀さうだ、手に白刃ア持たないが浮世に落ちた苦勞も苦勞、するだけの苦勞さした結句の果に一人の貞女を殺して來た黒田が好い手本だ、しかし僕を以て君に強ふる理由でないよ、ハ、ハ、ハ、もし川上か上田に逢つたら宜しく言つてくれ』

輕き會釋もろとも座を起てば、吉田雄藏、なほ不快の顔色に無言のまよながら、其身また起つて送り出さむとせし折しも、門口より破鐘の音響に等しきは正しく上田力、『吉田ア居りま



すかい」二十貫目の大兵より呻り出す聲この二階の隅まで手に取るが如し、  
聞くや否、はツと思はず満面を皺めし黒田健次、進退こよに谷ツて梯子の中段に立往生しな  
がら、鬼でも蛇でも恐れねど此奴ばかりは我ために十年來の苦手、前世からの暗劍殺と額越  
しの小聲、『さア事となりにけり、おい吉田、えらい奴が來たなア』  
始めての家ならねば心易く、小山の動き入るが如き上田力、この體を見上げて、『やア、久し  
ぶりの動物だな、こら黒田、降りるのか昇るのかい、まてくゝ兎も角も乃公が押し上げてや  
らう』いひつゝ五尺八寸大力の兩手をろりと伸ばせば、健次おもはず慌てゝ梯子段の角に向  
脛を打ちながら飛び上りぬ、『炭俵と一般の取扱せられて堪るか』  
上田力、鼠を袋に追ひ込むが如く昇り來て、例の達磨に似たる大胡坐、『吉田、此奴どうして  
舞ひ込んで來た、君また無用な端書でも呉れたんぢやアないかね、おい黒田、貴様ア今、炭

俵と一般の取扱せられて堪るかと言つたやうだが、炭俵といふものア淫賣宿の亭主と違ッ  
て世の中に必要の品だぞ』そら始まつた、どういふもんか上田、流石の僕も君だけに閉口す  
るよ、君また俗界の人間放れを仕た仙骨で居ながら、何故この僕に對つた時ばかり娑婆ッ氣  
を出して、さう無情に残忍酷薄だ、全體こりやア世諺にいふ通りで、お互の性が合はないん  
だらうか』ハ、ハ、ハ、貴様のやうな奴に性が合つて、それこそ堪るもんかい、しかし久しぶり  
の出逢ひだ、ゆるく徒然の相手に仕てやるから暫時そこに控へて居れ、時に吉田、前夜は  
火事騒動があつたね、見りやア上も下も道具を方付けたやうだが、定めし女子供だから一人  
で働いたらう、ところで却つて例の事には僥倖の引汐時だ、まづ此邊を一段落として宜しく  
去るべし、男兒そもく決意と實行の間に躊躇の餘地を挿むべきもんでない、實に過日  
歸つて直ぐ鼻アに相談して見たさ、するとね、ハ、ハ、ハ、ハ、女は執念深く忘れぬもんで、こ



ここに居る黒田が忽ち比較に出るよ、ハ、、、嘘にも義理にも黒田さんのやうな人は眞平御免ですが、あの吉田さんなら生涯夫婦の食ふものを缺いてもといふ大賛成だから、大歓迎だから是非、急に來るが宜いね『いや、段々と有難う御坐います、實は僕も前夜この通り幸ひ取方付けた荷物を此まゝ解かずに置いて、兎も角まづ身體だけでも先へ出ようかと思つて居ました』むゝ君だ、それでこそ君だ』

上田と吉田の間へ葉巻の煙、ぱつと吹き出して一種異様の微笑を左右へ振り分けし黒田健次、『はゝア、讀めた、こりやア吉田に女難の恐れある此家を出ろといふ上田の御接介だ、加之も出た上は神聖なる乃公の家へ來いといふ理由だ、や、吉田がために無事を祈る上田としては道理、さもあるべき筈の婆心で、また上田を重んずる吉田の性としては結局、その言に従はざるを得ないところだ』黙つてゐる、貴様の出る幕ぢやアない』しかし上田、ちよいと今、

聊か小耳に觸つた事を聞いたぜ、如何にも僕は曾て君が貧乏世帯の喰ひ潰しとなつて随分、世話にならないでもないさ、ないが今日、吉田を引き取るに就いて君の細君から反比例の槍玉にあけられなくつても宜からうかと考へる、吉田のために夫婦生涯の衣食を缺くも宜いさ、そりやア御勝手次第だが、嘘にも義理にも黒田さんのやうな人、やうな人とは君の鼻ア少々、不穩當な言を吐くもんだな、その様子ぢやア毎々御丁寧に僕の店卸しが始ることたらうなア』  
『ハ、、、、どういふもんか、ちよいと物を言つても此奴かういふ奴だ、よく考へて見ろ、我々に面も合はせないやうな事を仕出來した果が、本所の奥で九死一生に死に損つた身體を蟲の息で持ち込みながら加之も忘れた事を考へ出すやうに小首を捻つて、世話にならないでもない吐す、ハ、、、、こら黒田、いくら境遇が違つても幾年このまゝ逢はずに居ても、たとひ絶交しても昔おもへば互に一枚の煎餅蒲團を譲り合つて來た交友だ、別段、氣にも止め



ないが世間の他人へ對つて貴様、さういふ不埒な料簡で横著な顔を叩くと竟には一身の置き處もなくならず、この乃公は兎も角、散々あれほど厄介かけた乃公の鼻アには、せめて二月か三月に一度ぐらひ、たづねて来るもんだ、やい黒田、今ア淫賣宿の亭主となつて、どこの溝泥から掬ひあげたか似たもの夫婦の小鍋立で寢酒に酔ひ喰ふも宜いが、貴様にやア實に勿體ないほど過ぎた苦勞の仕死だつた、可哀さうに、あの貞女の墓の方角を忘れず、をりく詣つてやれよ、いくら腦味噌の腐つた身にも覺えてるだらう、病みほけて骨と皮になつた貴様の藥代に破れ三味線を抱へて、秩父嵐の北風で大地も凍る兩國橋の袂に繼ぎ合はした襦袢の素袷一枚で、こら黒田、この乃公が見付けた時、あの貞女が拜んだぞ、助けてくれと拜んだ理由ぢやアないが、どこに居ると問ひ詰めた乃公に、今あの人を見せましては妾が濟みませんから、どうか妾の一念で元の身體にするまで見通してくれと、なよ泣いて拜んだぞ畜生、

加之も其まゝ死んで宜い貴様が、のめくと生き残つて、あの貞女が二十六の死際に何と言つた、今までの難儀も苦勞も惜しくはないが只一事、たゞ良人の出世を見ずに死ぬのが残念だと貴様の手を握つたまゝ落ち入つたといふぢやアないか此、この罰當り奴ツ、あゝ世の中に墮落の仕やうもあるが、待合の亭主になつた出世を見て草葉の陰から嘸、さぞや喜んでるだらうよ、もはや今日、貴様を箸にも棒にもかゝらない奴と思へばこそ、この上田力の鐵拳が此まゝ膝の上にあるんだぞ、馬鹿野郎、少しやア恥を知れ恥を、罪を犯しても法網にかよらない白癡瘋癲と一般、人間も友達に打たれたり蹴られたりするうちが多少まだ價値だ、ねエ吉田、ハ、ハ、ハ、呆れの極、笑つて濟ますより外に殆ど對しやうのない奴だ』

諺にいふ地獄の釜の上を一足飛びの前途闇黒、いかな我武者の敵手にも唇を尖らして二の足を踏まぬ男ながら、不思議や偕この上田ばかりには汐入村以來の閉口、嚙んで吐き出さ



るよ如く叩き卸されても、さのみ腹も立たねば膝を突ツかくる勇氣もなく、まして多年浮世の落魄に苦勞死せし彼お島が事を言ひ出されては、石地藏の胸倉を取ツて捻ぢ伏せるほどの奴ぐうの音も出さず、たゞ悄然と差俯いて無言の體、

加之も沸くが如き熱情に血の氣の多い上田の天生、もはや呆れて笑ふの外、おのれに鐵拳を喰はすほどの價値なしといへど、その口の下より自然の情に溢れて、もしまだ猶いまだ我を見捨てぬ友誼の鐵拳ことに飛び來らば、さらぬも元來の大力に此面恰好が折曲るべしと、そろく薄氣味わるく面目なさに遁け出さむとする體を、上田じろりと横目に睨んで、ぶツと思はず吹き出しぬ、

『早く歸れ、貴様の面ア見ると何だか癩に觸ツてならない、乃公のやうな人に過ぎた胃の腑の強い身體でも嘔吐を催しさうだ、第一近來、何を喰ひ込んだが、でぶくと嫌に膏ぎツて丸

く肥え太りやアがツた事、まだ汐入村の昔を忘れないで、あの貞女の隨いて居た頃ア、どツか五體の節々に緊縮があツて、をりく人間らしい匂ひもしたが、今日の黒田健次これ既に腐爛しきツて鼻持がならない、溝泥に浮の來た土左衛門だ、ハ、ハ、ハ、何といはれても前世の約束と諦めて君だけにやア黙ツて歸らう、しかし吉田、論語よみ洒落れたところあり肱まくら、といふ川柳を君、知ツてるかい、人は木彫の置物然として四角張ツた臺の上で生涯も送れないから、ちと丸く轉んで遊びに来るが宜いぜ、大俗は却ツて大雅に通ずるの理だ』

『いや、いづれ其うち、また時機があツて、あの邊でも通ツた節に伺ひませう』ハ、ハ、ハ、念の入ツた御挨拶だな』おいく吉田、其奴に餘計な口をきくなよ、貴様また黙ツて早く歸れ』

黒田健次、やうく座を立ちながら、おもはず口のうちに咬いていふ、『人間萬事塞翁の馬の糞だ』



其三

東籬が下の隠君子に一時に生捕られて見世物となる團子阪の時節ならねば、まだ春の宵ながら千駄木の林町に往來の足音もなく、わけて女世帯の戸締り早く内證ひつそりとせしランプの小影、はや十三の弟が白晝の草臥に踏み脱ぐ夜具を幾度か打かけつゝ、姉を相手に何をか語る母親の私語低聲、二階の六疊には吉田雄藏、ありとも思へぬ静閑けさ、をりくくの咳拂ひと書物のページを翻す音のみ聞えぬ、

「ねエ、おッ母さん、今日あの二階へ始めて入らッした黒田さんとかいふ方ね、あの方、やはり吉田さんと交情の宜いお友達でせうか」をかしな事をいふ子だね、交情の宜いお友達かなんて、お友達だから、往來を通りがけに、ちらと二階の窓で吉田さんを見て其まゝ這入ッて來なすッたぢやアないかね」『だッてあの方、いやな人ですねエ』何故、なぜ、ほんとに和

女は我まよで不可よ、どんな方か知りも仕ないで、一見さういふ事をいふから何故ッて、あの方、いやだよ妾、あんな人は『これ和女、お春、女のくせに何といふ失禮な事をいふんだね始めての方に』始めてども何でも、あゝいふ人は大きらひ、妾が、お茶を持って二階へ上らうとすると、あの方が夢中になッて妾の事を變に、をかアしく、妙に吉田さんへ、吉田さん也大變、困ッて在らしッたよ、ほんとに嫌な、いけ好かない人、ですから妾、そツと其處へ置いまたゝ遁けて降りたのも知らないで、まだ何だか餘計なお饒舌を仕て居た様子ですよ、始めて來てさへ、あれだもの、此後あゝいふ人が度々、來るやうになッたら何をいふか知れやアしませんよ』おや、さうかへ、和女の事を吉田さんに、何か悪くでも『いよえさ、おッ母さん、まだ悪くいへば、いはれただけで堪忍も出來ますが、まるで妾と、吉田さんと、何故この頃は妙に、あんな嫌な、見當違ひの岡焼ばかり來るんでせう、井出の奴といひ、今



日の人といひ、そして歸りがけに、わざ／＼妾の顔を、じいッと見てさ』お春、母の口から斯んな事を、いへる筈のもんでないがね、これが外の人と違ッて、相手が吉田さんだから和女、幸福だよ、どう見られたッて自慢にこそなれ、決して此方の恥になる方ぢやないもの』

『あら、おッ母さんまで』まッたくだよ、女の子といふものは平生の心掛と其身の運次第で、どんな出世が出来まいにも限らないさ、しかし同じ出世と言ッても、いろ／＼あッてね、よく世間でいふ一足飛びの玉の輿は結局、あまり結構過ぎて、却ッて後の爲にならないから、やはり身分相應で、今は兎も角、行末の見込ある立派な人を見立てよ、無理のない自然の運に出世するのが女の手柄といふもんだよ、それには二階の吉田さんこそ、實は願ッたり叶ッたりの方だよ和女、まア今時の下宿屋に轉々したり、また往來を肩で風キッて歩く書生さんなんかを御覽、ちよいと外觀の舉動風俗を見ただけでも和女、どこに吉田さんのやうな眞面

目で氣立の優しい口數の妙い沈著いた靜肅な人があるもんかね、それに和女も知ッてる彼お常婆アさんが今の御主人で博士とか何とかいふ、大變な學者の家に在らしつたのを、どツか蒼蠅くない素人宿の二階を借りたいとの事から、その世話で來なすつた時、萬事お常婆アさんに委しく聞いたが、お春、あの吉田さんはね、この東京で第一といふ法律の學校を卒業も卒業、これまでにない立派な卒業なすッて、今が今でも直ぐに裁判所へ出れば判事とか検事とか、また外の事を仕ても樂に立身の出來る方ださうだ、それを和女猶更ら奥床しいぢやアないかね少しの氣振にも出さず、まだ／＼といふ御料簡で、あの通り夜晝、一所懸命に御勉強なさるほどの方だもの、此後どこまで御出世なさるか知れないよ、その吉田さんが幸ひ、うちの二階に在らしッてさ、年頃の娘を持つた一人母の氣は、ドンなだと思ッてるの、口へこそ出さないが、それに和女うかくと、まだ小兒のやうちやア困るよ、と言ッて外の方で



ないから、決して馴々しう、あまり心易立に猥りがましうなッては却ッて輕蔑められるやうなものの、今年もう十七にもなれば、少しやア萬事に氣を配ッて、なるほど馬鹿でもないと思はれるやうにするのが母への孝行だよ』

たのむ樹下に雨漏りし心地、七八年前に良人を失うて、世間の交際さへせねば人しれぬ内證に其日を送るだけの物はありながら、冥加のために御仕立物いたし候といふ片手業の看板かけつゝ、女主人の獨身に後家を立通して、今年こゝに十七の娘を持ちし親心、頻りに聲を潜めて我を忘るゝ折しも、二階の降口よりランプの灯影ほつと射して吉田雄藏の聲、「女主人、甚だ失禮ですがね、ちよいと上ッて来て下さらないか、實は此方から降りる筈ですが、わざと御免を蒙ッて勝手を言ひます』

如何な事ありとて、靜に音なく降り來りて必要の外は、おのが身勝手に物さへ言はぬ人が、二階より其まゝ階下に對うての聲、おもはず眉を擧めながら、はいと答へて立ちかけし片膝、

そつと振り返りつゝ、「其お茶を入れてね、母の咳拂する時分に持ッて來るんだよ』

花は昔の夢、春の色香は惜し氣もなく娘に譲りて、良人なき後家の寂びたる葉櫻ながら、やうく四十を越えしばかりの浮世馴れし體に、手軽く前掛の端を帶の片脇へ挿みつゝ二階の一室へ迂り入りぬ、「何か御用で、おや貴君まだ御勉強して在らッしやいましたの、まア吉田さん、をりくは早く氣樂に宵寝でも遊ばして、第一お身體を大切になさらないと貴君いけませんよ、ちと考へて世間の怠惰書生を手本になさい、ホ、ホ、しかし御用は』

吉田雄藏、筆記の綴込を幾冊か机の上に擴けしまゝ、置ランプの影より靜に此方を振り向いて、雪の封じ目を解かれし梅花に等しく、おもはず微笑を浮べぬ、「また女主人に叱られましたね、だが元來の愚物、よほど人に過ぎた骨折で勉強しきらないと、なか／＼逆も通例の



人間になれない奴ですよ』あら、うまく仰しやいますよ、もしこれが外の事なら吉田さん、貴君は安心の出来ない怖い方ですよ』ハ、ハ、ハ、まるで悪人のやうに見られましたな、時に女主人、お忙しい中を、わざわざ呼び上げて、加之も唐突で甚だ濟みませんが、少々、急に、お談話の仕たい事がありましたね』おや、何だか改つてで御坐います事、全體どういふ御用で、かう萬事お心易く仕て戴いた上は猶更、御遠慮なく打明けて』や、さう言はれると却つて困りますがね、實は女主人、折角いろ／＼と御深切に今日まで段々お世話になりましたが、少し都合があつて、近々のうち、他へ引移らうかと思つて居ます、無論、兄弟も同じ友達の家で、そら二三度こゝへ来て能く御承知でせう、あの身體の大きい、山のやうな上田といふ男の家です、ありやア家内と男の子が一人あつてね、本所の横網に小さな借屋住居して居ますが、やはり二階が空いてるから、といふ理由で』きくや否、寢耳の大水に枕頭の珠玉

を押し流さるる心地、はツと思はず進みかけし膝、じつと心の底に引き止めながら、あくまで顔色に包めど、なほ何となく吉田雄藏の顔を怨めし氣の眼色に打守りぬ、

『おや、さやうで御坐いますか、いえ御都合とあれば、いくら何と申し上げたところで、どんなに、お引き止め申したところで致方もなし、わけて物事に行届かない、御承知の通り不束な母子ですから、定めし、嘸お氣に召しますまいし、思召に叶ふ筈は御坐いませんが、しかし吉田さん、こゝまで貴君、どうか斯うか堪忍して下さいですもの、いけない事は不可と、ひらツたく、母子の身のためになりますやう、御叱責を戴いて、ねエ貴君』『いや、女主人、決して、どうして、なか／＼さういふ理由で、そんな事で、かう俄に出るんぢやアないですよ、實は萬事、あまり深切に氣を付け過ぎて下さるから、最初の間は却つて居辛いくらるに思つて居たです、しかし其、居辛く思つたのも、おひ／＼横著に馴れて来て、ハ、



ハ、づうくしくなつて来て、この頃ぢやア殆ど他人の厄介になつてるとは思はないほど無遠慮な我まよになりましたがね』吉田さん、その上は、もう承りませんよ、折角そこまで、假令お世辭でも、他人の家に居る氣は仕ないと、そこまで打解けて下さる以上、さう急に他へ、まるで遁け出すやうに在らツしやらなくツても宜しいぢやア御坐いませんか、しかし是非、是非とも出ると仰しやれば、いづれ何か御不足のある筈、せめて母子の念晴しに其、その御不足を今こよで聞かして戴きたう御坐います』や、ますます困ツた、こりやア困ツた、こりやア困りましたな、どうも僕は、天生この口が無器用で、頗る世事の談話に下手だからね、わけて斯ういふ事には不得手だ、いや困ツたわい』ホ、何も貴君、お困りなさる事は無いぢやア御坐いませんか、また貴君お口が上手の下手のツて、賣藥の口上では御坐いますまいし、そんな事で吉田さん、つまるところ外の事は倍置いて、全體これが小癩に觸ると

か、第一こんな事が氣に入らないとか、それさへ承れば』女主人、こよまで言ひ出して今更、甚だ變に何だか妙ですが、まア明朝あらためて、あすの朝、あらためて御相談する事に仕ませう』そりやア貴君、可哀さうで御坐いますよ、貴君ア明朝でも宜しう御坐いませうが、母子が今夜このまよ、氣にかゝつて寝付かれませんもの、また今夜こよで仰しやるも明朝、承るも同じ事』さア其、同じ事がね女主人、困ツたなア』おや、また困ツて在らツしやいますの、よくく母子に言ひ出し悪い不都合があると見えますねエ』や、さう言はれるよりやア、イツそ打明けて仕舞はう、お恥かしいが女主人、實は吉田雄藏、頗る貧乏でね、さて今までは何とか工夫も算段も仕て來たが、いよく窮しましたよ、もはや鏝一文の出どころも無くなつて、月々お約束の物を拂へないのみか、此後どういふ御迷惑をかけるかも知れないから、今のうち、身の襤褸を出さないうち、一まつ無事に、こよを引揚げたいと



思つて、ところが僥倖、あの上田といふ骨肉に等しい者がね、勿論、これも貧乏は貧乏ながら、どうせ足らぬ勝の世帯へ一人ぐらゐる、といふやうな理由で、つまり當分、甚だ感心しないが食客に押し掛けるンですよ、ハ、ハ、ハ、ハ、昔の諺にも貧は諸道の妨害と、いひますからな」

「おや、おや、どういふ難かしい理由かと存じましたに、おやまア吉田さん、さういふ事で貴君、只それだけの事で貴君、母子を目の敵のやうにして、是非とも他へ往くと仰しやるンですか、ホ、ホ、ホ、ホ、餘の事なら兎も角、さう承りましては猶さら、どこまでも母子で、お引き止め申しますよ、はい、なアに貴君、人にこそ依りけりて、貴君のやうな方が、わづかな金銭づくで、いささ失禮では御坐いますが、ホ、ホ、ホ、ホ、吉田さん、あまり萬事お固すぎて貴君より此方が困りますよ、これ、お春、ちよいと其お茶を入れてお出で」

天晴れ當意即妙と心得し一策の甲斐なく、びしやりと真正面の一叩きに叩き潰されて吉田雄

藏ぐうの音も出ず、たゞ聲なき眼ばかり剥き出しつゝ南無三寶の二の矢を射損ぜし折しも、はや階下より敵の本尊が持ち運ぶ茶にさへ得ならぬ色香を含んで、母子無理に押並びし手前、いよく遁け損ねて生捕られたるが如し、

「お春や、これからは萬事よく氣を付けて、どうせ行届かないながらも、なるべく鹿略のないやう仕ないと不可よ、もし今までのやうな不都合では面白くないから急に引き移つて外へ往らつしやるよとさ、吉田さんが『おや、ほんたうで御坐いますか』ほんたうともさ、現に今それで、母が段々お謝を仕て、やつと御勘辨して戴いたところだよ、せめてねエ吉田さん、これが母の半分も物事に氣を揉んでくれよば宜しいンですが、御覽の通り何分まだ貴君、手助けどころか世話ばかり焼けてね、其くせ年だけは十七で、ホ、ホ、ホ、ホ、やはり父親のない故で御坐いませうか、それ、それだから困るよ、何故うツかり仕てるのさ、吉田さんのお茶が、



もう冷めたぢやアないかね」

さらぬも眞ッ甲に初太刀を浴びし吉田雄藏、ますく寸隙なく打込まれて、うけ流すべき手練もなければ身を翻して一方の血路も見出し得ず、たゞ惘然と敵の手に任しながら、おめく急所を刺さるゝに等しき體、なるほど斯る戰場には餘りに初陣すぎたり、されど恐ろしきは此初陣武者、太刀打こそ初心なれ、自己が一念かうと思ひ詰めし覺悟は千場萬馬の古兵にも勝りて、動かざること磐石の如し、

其四

人事一切これ黄金の點より割り出せば、路傍の瓦礫に似たる一個の無用物たり、人間萬事これ名聲の上より割り出せば、徒らに古昔の愚を守る地中の埋没物たり、されど紛々たる世間の俗臭を打算し來りて夕顔棚の詩味一滴に如かずとすれば、正しく凡流の圏外に逸出せる自

然の高尙幽玄に叶ひし境涯ながら、あと白雲の山に分け入る仙人の袂にも秋風そよと肌寒き浮世の恐ろしさを思へば、あはれ借屋住居に妻子を抱へて味噌醬油の通路を踏み潰し得ぬ上田力その本人に取りては、やはり貧乏は好んで仕たくなし、

されど幸ひ、寒中に著替の布子なくとも厨の壁は落つるとも、世の中に持つべきものは心ある眞實の友垣、一朝かの倉橋幸藏が羽翼を伸ばして海外へ飛び去るの際、得たる萬金を汐入村以來の同志に頒ちし其うちの一分こゝにあれば、功名富貴の反比例に生まれたる男も飢渴に迫らず朝夕を送りて、加之も連れ添ふ妻は不思議の縁ありて自己が口より常に濱町河岸の斑紋鯨と罵りし例の下女お菊の方、もし山中ならば獵夫の鐵砲に規はるとほどの醜女ながら、心は此良人を護るがために天より下し賜へる如き美質、まして生まれし男子は父母の容貌とちらにも似ず玉の如し、



夜に入りて夫婦の間の一粒種、すやくくと神の如く睡りし後は、わけて天真爛漫たる古風を帯びし質朴の良人に、うき世の苦勞を身の常として餘所を羨まぬ質素の妻、そもく金殿玉樓の夢にも知らぬ快樂の中にあり、

『おい、もう十二時を過ぎたらしいぜ、よせよ、どこの人間も寝る時刻だ』ですから良人、かまはず先へ御勝手に御就眠なさいよ』だがね、さう和女ばかり精を出してに乃公が先へ、いくら何でも少々、氣の毒だ、聊か濟まないやうな氣がするよ、これといふ用もなくつて年が年中ぶらく仕てる御亭主だからなア』ホ、妙なところで餘計な御遠慮なさる事ね、しかし今夜これを縫つて置かないと困るんですよ、こりやア良人、翌の朝すぐ坊に著せる襦袢ですもの』だから猶さら、乃公が先へ寝ちやア濟まないよ、と言つて力業で手傳へるもんぢやアなし、まア面白い談話でも仕て和女の氣を紛らさう』わさくく氣を紛らかされては却

つて手が後れますから、黙つて寝て下さい、良人も坊も寝てる間が妾の休まる時ですよ』ハハ、なるべく起きて働いてくれといはれる筈の亭主殿が、一時も早く寝てくれ、助かるといはれる理由だな、や、しかし奈何せむ、事實に於て無理のないところだ』おや、また理窟が始まりましたね』おい、理窟ぢやアないが堪忍しろ、連れ添つた因果だ、せめて如斯ぐらゐの音は出さしてくれよ、憐れむべし苦學十年の曉、世間へ出て一言もない當世不向の馬鹿野郎に出来たんだ』何ですよ、つまらない、世間どころか家内に居てさへ物の言へない啞ですら、生涯大事の亭主に仕てる女房があるぢやアありませんか、まして二十貫目もある立派な大きい身體を持ちながら、ホ、をりくく良人ア、そんな弱い音を吹くから無効ですよ、もし世間で饒舌るばかりが男の能なら落語家の前坐でも濟みまさアね、馬鹿々々しい、少しやア例の黒田さんを見習つて、あれまで横著になられても困りますが、さう自分で自分の氣



を落さないやう平氣で在らッしやい、世の中は心の持ちやう一事ですよ』や、和女のやうに言ッてくれるから、これでも多少まだ亭主らしく見える時もあるのさ、なるほど、のんこの酒アで黒田の十分一も面の皮が厚けりやア、いくら乃公だッて、まさか件の如き社會の無用物にはなるまいよ、ねエ、ハ、ハ、ハ、いや黒田といへば彼奴は全體どういふ頭腦の組織だらう、汐入村以來、相も變らぬ闇雲飛び乗りで、さらに近來ますます其度が盛になッて來たやうだ、實ア今朝も例の事で吉田のところへ出掛けると奴、今や將に去らむとして乃公の聲に驚いたか二階の梯子段で立往生の體さ、ハ、ハ、ハ、』あら、黒田さんが近ごろ吉田さんのところへ行くんですか、そりやア良人、いけませんよ、あの眞面目な初心な正直な人を、あの惡摺れた大膽な大風呂敷の口達者に任込ましちやア』だから乃公も見や否、搦槌で味噌を摺り潰すやうに酷く遣ッたさ、まるで形なしに怒鳴り付けてやッたがね、さて和女、あれで

も彼奴この乃公を何とか思ッてる故か、あの口を閉ぢたまゝ黙ッてるぜ、吉田は無論、高を括ッて眼中にないが川上でも倉橋でも眞正面から火の吹き出るやうに喰ッてかよる無遠慮な奴がさ、徹頭徹尾、糞土の如く罵倒されながら由來この乃公にばかり閉口するかと思やア、何だか却ッて可哀さうだよ、つまり根が馬鹿でも白癡でもないからなア、よくく自己が世話になッたと思へばこそだ、そこで乃公も亦、外面は目の敵のやうにするが實は内心、どうか仕て正常な道へ救ひ出したいよ、現在、今のやうな境遇を脱して彼奴もし正直に世を渡れば、才氣雄辯なく和女、尋常の奴ぢやアないよ、うかくすると或點に於て川上や倉橋を凌駕すべき奴だ、それが惜しいかな門外一步の過誤で竟ひ今日の黒田健次を作り出して仕舞ッた、考へて見ると汐入村五人の平均上、横に飛び放れた彼奴を元の軌道へ引き戻すだけの者がなかつたと共に、彼奴また他の四人が有する長所を取ッて自己の短を補ふだけの容量



も工夫もなかつたんだな、しかし川上や倉橋に對して反抗する割合に、就中この無能の乃公に屈する所以は、彼また彼が平生の言行に顯はるゝが如き奴でない證據だよ、どうかして底のぬけた大道白に等しい乃公の無能さ加減を、少々狂氣の振り廻す剃刀の如き彼奴に譲つてやりたいもんだなア』なるほと、さう聞けば、さうかとも思ひますが、また良人のやうに黒田さんを買ひ過ぎてる人はありませんよ、勿論、足らぬ勝の世帯染みた女の眼では猶更酷く見えませうが、あの人が食客の時分を考へて御覽なさい、随分まア世の中に珍らしい御食客様でしたよ、ホ、ホ、ホ、しかし、あれほど浮世馴れた達者な辯を持つて居ながら妾を口で轉がすやうな世辭愛嬌もなくつて、最初から終局まで地金の横著は横著で通しきつただけ却つて黒田さんの價值かも知れませぬね、また斯うはいふものの、良人に連れ添ふ妾ですもの、今更愚癡ッほく黒田さんに不足も何もありませんがね、あの吉田さんには、なるべく近づけ

ない方が宜いでせう、時に吉田さん、何時から來なさいますの』實は今のところに少々、居れない理由があつてね、すぐ今日にでも來る筈だったが、團子阪の火事騒動で其家も道具を方付けたほどだから、明日か、遅くも明後日は必ず來るだらう』おや變ですな、どういふ理由があるんです、何か知りませんが吉田さんに限つて現在、今日まで居つた其家に居れなくなるやうな事は』ハ、ハ、ハ、ない筈が、あるからさ、つまりね、其家に年ごろの美しい娘が居つてよ』おやッ、あの吉田さんが、まア呆れました事、さうですか吉田さんが、こればかりは分らないもんですねエ』おい、まだ何もどうかう、いふんぢやアないぞ』もう出來て仕舞つた理由ではないんですか』馬鹿ア言へ、をかしく出來て仕舞つてから仕やうがあるかい、いづれ降る空の曇りで身の濡れない傘の用意だ、折角あれまで眞面目に仕上げて來た吉田をして一朝の蹉躓なからしむるためだ』しかし良人、外の事と違つて、さういふ事は考へもので



すよ、たゞ良人ばかりの料簡で無理に、吉田さんを此方へ引き取るやうな事をなすつちやア却つて、よくありませんよ、たとひ出来て居ないにも仕ろ、はや既に二三度、ちよいと往つて見た良人の眼にさへ餘るほどの、妙な工合があればこそでせう、第一それに本人と本人との心が、どう通つてるか、どんな約束あるか知れも仕ないものを、また吉田さんは元來ああいふ萬事おとなしい人ですから、兄のやうに思つてる良人の一言で、來いといへば否とはいひなさいますが、そりやア良人、猶よく考へた上で、『大丈夫、吉田に於て其、そんな心の通つたり約束のあるやうな筈がない、ありやア和女、根が都人士の夢にも想像し得ない山家生育で、里の艱難から直に學校へ飛び込み前後六年數千人中より優等第一を占めて出て男だ、加之も浮世の風塵には未だ深く接しないが、外貌によらない案外の鯁骨で意志の強堅なる態度の慎重なる前途希望の遠大なる、なか／＼今あの境遇で女色を顧みるやうな違もな

し人間でもないよ、そりやア大丈夫だがね、わざ／＼その大丈夫を守らするよりは寧ろ、その大丈夫の必要さらに無い乃公の家へ引取る方が彼のため宜からう、どうだまた實は其家の娘といふ女、甚だ凡に超えて人を動かすに足るの美形でね、さらに其また母親といふ女が四十後家の頗る世辭の宜いのみか、どうやら母子もろとも一方ならず吉田を歓迎し過ぎてるやうだ、これ大に不可ぢやアないか、色よりも戀よりも義理人情といふ、世に恐るべき大盤石に身を押へられて動けぬやうな結果あつては、吉田のため實に歎すべきことつた、全體かういふ事を今さら言ひ出しちやア濟まないがね、そも／＼汐入村の同志いづれも妻なるものよ一點に於ては、よほど身に過ぎた幸福のあるやうだが、却つて聊か其理と其常に叶はないところがあるぞ、第一まづ川上が濱町の戀壻となつたのも宿志いまだ達せざる半途で、只その情に搦まれ其縁に結び付けられた不自然の形跡なきにしもあらずだ、また倉橋が時の大臣に見



込まれて其娘と約束したのも彼が性質としては、随に人知れぬ何等かの好まざるところを海外一躍の犠牲に供したらしい、かの黒田の如きに至っては別して論外の沙汰だ、現在さらに乃公と和女の間も亦これ一種、いはど妙な工合から變に出来上った奇縁で、この馬鹿亭主を守ること斯の如き良妻の和女は殆ど乃公に取つての拾ひものだ掘出物だ、ハツハツハ、ハ、ハ其年の南瓜うまく幸ひに當つて野郎さらに恐悦至極の體だが、さて五人のうちで四人の最後に残つた一人の吉田雄藏、願はくば業成り志遂けて人道の上より一家の上より實際正當に妻といふものゝ必要が起つた時、その正當なる必要に應じて加之も更に一點の過不及なき妻を迎へさせたいよ、わるくいへば以上の四人いづれも時いまだ來らざるに迎へた變則だ、たゞ變則としては皆これ豫期よりも案外に出来の宜かつたのだ、もし萬一どんなに悪くつても不足のいへない奴等だ、ね、だから吉田を今のうち、たとひ多少の無理があつても強ひて

彼家を引出さうとするのさ』おやまあ、吉田さんの事から大變、いろんな小耳の痛い事ばかり聞かされましたね、しかし良人、夢にも、戯談にも、いくら心易い打解けた間でも、そんな事を口へ出しちやア、いけませんよ、叩き出されたつて蹴り出されたつて行きどころのない妾のやうなものは格別、ホ、ホ、意地から喰ひ付いて動きませんがね、お生家が宜くつて、御容貌が善くつて、萬事當世仕込に伶俐な女は、自然どツか奥底に氣の強いところがありませんからね』無論よ、乃公だつて和女だから談すのさ』時に吉田の事、宜いかね、その決心で引取るんだから』そりやア良人、そこまで良人、さういふ御料簡でなさる事なら妾に何の、兎や角あるもんですか』ちやア明日、此方から迎ひに出掛けてやらう、だが定めし恨むだらうなア、あの母子が乃公を』どうせ良人、先方の覗つてるのを横合から不意に取り外すんですもの、あまり嬉しく思やア仕ませんよ、しかし其事が吉田さんの身の爲になるといふ御料



なら、いたし方ないぢやありませんか』そこだ、如何にも大信は却つて信ならざるが如し、だしぬけに飛び込で、否應なしに吉田の荷物を擔ぎ出してやらう』ホ、ホ、ホ、まるで畫盜賊ですわエ』なアに相手が女だから面倒だ、實ア和女にこそ斯う饒舌るがね、ぐづく他の女郎に取ッ捕まツちやア頗る談判が下手だよ』下手で僥倖、もし良人その好男子で上手だつたら、うかく一人で外へ出せませんもの』ふざけるな此奴、ハツハツハツ、ハ、ハ、』

其五

高が一閑張の机一脚に粗末の筆硯文具、わづか上下三枚の木綿衣具、洗ひ洒しの著替を押し込めし柳行李一個、積んで山の如きも既に彼が腦裡に消化し去りし讀殺の書籍幾冊、以上これを一括して屑屋の量目どれほどの價あるべき、たゞ多年の苦學懺悔中より砂金を拾ひ集めし如き筆記ものと本人の身體さへ持ち出せば其他に用なしと、生捕を取返すに等しき上田力、夜の明けるや否、我家を飛び出しぬ、如何に見ても當世の産物にはあるまじき容貌態度、道幅狭き團子阪を臺の歩むが如く上りて、やうく千駄木の屋根瓦に日影の射すころ、はや林町の例の門口より例の破鐘聲、吉田ア居りますかいと響き渡りぬ、

『おや上田さん、まア貴君お早くから、さア此方へ、どうか直接お二階へ、これお春や上田さんが入らツしたよ』第一この世辭愛嬌が氣に喰はぬ、また何處へ行くとも斯うは持てぬ嘗の乃公の名を斯う馴れくしう、加之も用なき娘の名まで呼んで手を取らむばかりの追従が猶さら以て面白からずと、上田そのまゝ輕き無言の會釋を残して二階へ上れば、吉田の姿なくて本敵お春が我物顔に机の邊を禱かけの拭き掃除、眞白き手先に雑巾を持ち添へながら微笑を浮べて慇懃の體、名筆の浮世繪より脱け出でたるが如し、や、此女いよく油斷がならな



ぬわい、折しも上り来る登音、吉田かと思ひの外の母親、はや茶盆に菓子を添へての待遇振、そつと振り返りつゝ、『まだ和女お掃除を仕て居たの、ぐづぐづとさ、もう宜いから階下へ降りて外の事を、ほんとに上田さん、あの通りの小兒ですから困りますよホ、』何が彼女、小兒なもんか、おそろしい小兒ぢやわいと、上田おもはず腹の底に冷笑ひながら、『吉田め何を仕て居るんです、けしからん奴だ、自分の居室を他人に掃除さすなんて』『いよえ貴君、わざと修行のため、娘にさして戴きますので』『そりア兎も角も吉田ア』吉田さんは今朝、よほど今朝お早く出られました』『不在ですか、全體どこへ行きました、むよ最早や出たんですか』南無三寶、さア仕舞ツた、どうやら我も生捕られたる心地して、餘所の女郎には頗る談判の下手を自白せし前夜の前兆、そろく今こゝに頗る下手な其談判へ引ツかよりさうなり、

『上田さん、まだ二三度お目にかかりましたばかりで、かやうな事を申し上げては、甚だ出過ぎた女と思召しませうが、かねぐ吉田さんから承ツて居ります事も御坐いますし、それに女といふものは御承知の通り、じつと胸に持つて居る事が出来ませんので、ついね、ハ、ハ、外でも御坐いませんが前夜、あの吉田さんが唐突に急に手前方を出ると、仰しやいますの、勿論、萬事かやうな不行届で、どうせ御氣に召さない事ばかりですから、都合で外へ行くと仰しやれば致し方も御坐いませんが、その御都合が貴君、ホ、ホ、そして上田さん、どこへ往らツしやるかと思へば、貴君の御家ださうで御坐いますね』  
そら來たと覺悟しながらも、はや既に二階へ押し上げられて遁け場を失ひし今更、此まよ例の筆記ものだけ抱へて飛び出しもならねば、手持無沙汰の兩腕を組んで山の如き肩に太き首骨を埋めつゝ、『や、さうです、實ア僕の家へ、いろく深切に世話を仕て下すつたさうだ



が、彼も少々、いつまで悠々と暢氣な境遇に置けない理由があつてね、これでも兄分の僕が兎も角、引取るといふ次第です』ださうで御坐いますね、しかし上田さん、手前方こそ母子とも此通りの惘然で居りますが、あの吉田さんは貴君、なか／＼そんな悠々とした暢氣では在らッしやいませんよ、朝は人の目の覺めないうちから、また夜は一時が二時まで、よくまア、あれで御身體の續くこつたと、をり／＼は入らぬ差出口と存じながらも、ついねエ貴君、御諫言するほどの御勉強で御坐いますよ、また此まゝ居れないといふ理由も失禮ながら、ちよいと、お聞き申さないでも御坐いませんが、決して貴君、さやうな御心配なく、折角こゝまで打解けて御馴染になつたんですもの、もし手前の勝手を申せば他人のやうに思召さず、この後は猶更の事、何卒いつまでも相變らず願ひたいんで御坐いますよ、何も貴君さう俄に水臭い事を仰しやらなくつても、ホ、ホ、まだ良人が居りまする節、どうか斯うか其日を過

すだけの用意は致してくれましたから、ホ、ホ、御安心あそばして、また行々は、どんな事で上田さん、貴君へ御無理を願ひますかも知れません、母子で御坐いますから』

吉田が言葉に窮して貧乏の一點張を張り損ねし其失敗を知らねば、眞正面より不意に饒舌り立てられて上田いよく前後の煙に巻かれし體、されど行々この我へ母子が無理を願ひに出るとは正しく其事、もはや奥の院の扉は會釋もなく開けたり、第一あの娘が今朝この机邊を我物貌の小面といひ、さては油斷大敵また既に顔前へ押し寄せたりと、さらぬも大の眼球ぐる／＼と丸くして夜著の袖口に似たる唇端を反り返しぬ、

兎も角も今朝、吉田ア何處へ行くと云つて出ました、いつごろ歸るとか、何とか言はなかつたですか』はい、どこへとも仰しやいませんが、五時、ちよいと過ぎたばかりでしたらう、事によると上田さん、貴君の御家では御坐いますまいか』なるほど、や、さうかも知れん、



ぢやア此まゝ歸りますから、もし行き違ひに戻つたら、すぐ其足で引ッ返して來いと言ッて下さい』しかし兩方から貴君、そんな空足なさらいでも其うち、お歸りになりますよ、もう暫時』なアに必要なためには幾何、空足を踏ましても宜いです、自分のこッてすから是非、すぐ來いと言ッて下さい』申しは致しますが、そんなにも何も貴君、實は吉田さんの事に就いて猶、よく伺ッて置きたい事も御坐いますから、御迷惑でせうが上田さん』いや、今日は少し外に急な用もありますから、また改めて聞きますせう』たッて御止め申す理由ぢやア御坐いませんが』時間ぎれの用です』まア貴君』失敬ッ』

本人の吉田も居らぬに我たゞ一人、この浮世馴れた口八丁の四十後家を相手に、うかく長居して堪るものかと、かゝる事には案外の弱蟲、袖を拂ふが如く座を起ッて、遁け出す如く二階の降口へ掛けし片脚、つるりと這ッて踏み外すや否、とめ途なき二十貫の大兵肥満、どたんばたんと背骨を打ちながら床板まで突き抜く勢ひに顛け行きし下より、今しも昇らむとせし娘のお春が不運、左右の壁に飛び退く違もあらばこそ、あはれ盤石に押し潰さるゝが如き悲鳴、きやツと叫びぬ、

夜更けて後、面壁の定坐より追ひ出されし達磨の如く、たゞ惘として我家に歸り來りし上田力、何は儲置き、まづ第一に坊は寢たかと差覗く例の調子もなく、針の手を止めて迎へし妻の愛嬌にも眼をくれず、ランプの灯影に反いて火鉢の横に自己が身を抛ぐるが如く、どつと坐したるまゝに總身の太息、ほツと吐きぬ、

『おや、良人どうかなさいましたの』いへども兩腕を組んだるまゝの無言、『大變お顔の色が悪いちやアありませんか』きけども猶そのまゝに差俯いての無言、『あれ、をかしい事、變で



すね、何か御心配でも出来ましたの』  
 始めて我に返るが如く、やう／＼垂れし頭をあけ組みし腕を解きながら、おもはず大胡坐の膝を直して珍らしからぬ妻の顔、じつと見詰めぬ、『ねえおい、何故この乃公は斯んな奴に出來たらう、今日ばかりは平生の馬鹿の故でもなかつたが、とんでもない事をして仕舞つたよ』身に浴びずとも少しは浮世の塵に染みて、たとひ詔はずとも人を外さぬ世辭さへあれば、どこに恥かしからぬ男ながら、元來うまれついでの本調子、あまりの潔白さに却つて世間よりは後れ勝の良人、わけて我身の連れ添ひし後は、氣の毒や猶さら妻子に心を引かされて自然に氣も弱りし人と、平生より口にこそ言はね萬事を身一個に掻き集めたる世話女房、わざと落著いて驚く顔色もなく、靜に番茶を汲み出しながら、『全體どんな事が出来ましたの』頑たる巖組に等しき五體いよく悄然として、大胡坐のまゝ舟漕ぐ如く聲を摺り寄せぬ、『今

朝、あの林町へ出掛けてね、何の氣なしに二階へ上つて見ると吉田が不在さ、加之も其家の後家女に取ッ捕まって、おひ／＼面倒な談話になつて來たから、こいつア叶はないと慌てよ遁け出した拍子に和女、梯子段を踏み外してね』あれ、まア良人、小兒ぢやアあるまいし、氣をお付けなさいよ、みツともない他の家でさ、しかしお怪俄もなくつて』なアに乃公の怪俄ぐらゐで濟めば結構、お目出たい理由だが、運わるく其家の娘が結局それがため吉田を出さうといふ其、その娘が和女、二階へ下りかけた頭の上へ此でツかい身體が落ちたから堪らない、きやツと言つたまゝ氣絶して仕舞つてよ』おやツ、まア大變な事をなさいましたねエ』折から吉田が歸つて來て、飛び込むや否すぐさま醫者へ飛び出す、二階からは狂氣のやうに母親が駈け降りて泣くやら叫ぶやら、乃公も一時は殺したかと思つて』どうなりました良人、それから』ところが僥倖、やう／＼息を吹ツ返してね、しかし立てない、どうしても立てな



い、醫者が來ての言葉には、可愛さうな事を仕たよ、左の足首を挫いて骨が少々『もし良人、跛躓にでもなりやア仕ませんか』さア、そこだ、うまく癒れば宜いが、事に依ると、さうかも知れないと聞いたから吉田と母親が付き添って小石川の病院へ遣つたもの、和女、その間この乃公が一人で留守番をさせられて居た辛さア、けふ一日で實に瘦せるやうな氣が仕たよ、加之も吉田が午後、病院から歸つて來てね、母子とも決して貴君を怨んでるやうな口氣もなから安心なさいと言つたが、こりやア乃公を慰める一時の辯でもない、その一言は正しく吉田の心中に乃公の失策を背負ひ込んで何等か大に期するところあつたらしい様子だ、嗚呼こよまで前途圓滿の妻を希うて吉田のために苦心した乃公は、寧ろ却つて吉田をして跛躓の鼻アを持たすかも知れないわい、咄々この魯鈍奴、いやはや雙方へ濟まない事を仕て退けた、これに懲りて以後一切、もう生意氣な口も手も出すまい、や、他事どころか考へて見ると自

己が一身すら斯く出來損つた不完全の乃公だ、しかし残念な事を仕たよ、汐入村以來の五人中、第一の完全を望んだ、あの吉田に今さら不具の鼻アを持たさうとは、夢にも思はなかつたが、人事意外こよに至れりだ、あゝ不可、不可『しかし良人、此方の勝手をいふやうですが、つまり思ひもよらない不意の災難で、どうせ出來た事は出來た事として、まづ仕方がないと諦めて貰つてさ、もしそれがために母子の念が届けば良人、それこそ却つて不幸の中の幸福とでもいへる理由でせう、たゞ吉田さんに対しては、實に申譯もない事で、萬々お氣の毒ですが、これも亦かういふ自然の成行で、所詮かうなる縁と思つて戴いた上、そこは妾が良人になり代つて生涯、するだけのお世話は勿論、どこまでも謝りますよ』どうか、さう仕てくれ、ね、さうでも仕て貰はないと乃公の立つ瀬がない『だがね良人、あまり身體の重い故か脚下の工合か、よく良人ア二階から踏み外して落ちる方ですよ、覺えて在らツしやるで







なりし春の名花一輪この吉田雄藏が宿とせる天井板一枚の下に咲いて猶更ら其後の色香いよ  
 く深きを思へば、外面に現はるゝ三寸の疵よりも、人生の行路さらに恐るべきもの、そ  
 の痕跡なくして總身の皮肉に深く喰ひ入るべき大疵ありと、奮勵一番、將に去らむとせしが  
 悪戯なる運命の神どこまで人を弄ぶか、その名花また吉田雄藏がために心を盡くせし知己  
 刎頸の過失に踏み潰されて、あはれ描ける如き十七の美人を不具となしぬ、

小鳥の羽翼を縮めて葉蔭に棲むが如く、頼む良人を失うて渡る浮世に力草なき後家の身が、  
 過ぎし形見に残る十三の男の子たゞ一人の外、わけて女親の心には掌中の珠玉と育てし十七  
 の娘、加之も路傍ゆく人の歩さへ止むべきほどの娘を、如何に思はぬ不意の災禍とはいへ、  
 現在の母が見る眼前で不具に仕て退けむとは、

名筆の浮世繪より脱け出でたるが如き美貌も、あはれや歩むに空確を踏むが如き身となりて  
 は白玉の一片を缺きし名物の廢たりもの、いづこに元の色香あるべき、そもく誰がための  
 涙に拾はるべきか、

二十六の曉まで完全無缺の吉田雄藏が面上に拭ふべからざる三寸の疵と、十七の年まで圓  
 満無垢の處女お春が左の足を損ねし生涯の不具と、その輕重いづれにかある、もし此疵のた  
 め彼は一入さらに堪へ難き思ひの露を運び、彼が不具となりしたため一旦その家を去らむとせ  
 し吉田雄藏に捨て難き心の情ありて、雙方こゝに何の罪も報いもなき夫婦となるの縁あらば、  
 この謹直なる青年の人格を損ぜず此あはれなる花の色香も散らさず濟むべきに、うろく何  
 處を狼狽へまはりし月下氷人の手脱りぞ、



吉田雄藏は三寸の疵に五尺の身を縮めて生涯の打算上、もし彼を妻とすれば如何なる良人となるべき、彼お春は花の如き身に一脚を損ねて生涯の運命上、もし吉田雄藏を良人とすれば如何なる妻となるべき、

戀に縁あるを眞實とすれば、竟に添ひ遂ぐべき良人の疵と妻の不具は戀の神の賜物にあらずして、正しく互に其縁を購ひし生涯の代價となるべく、たゞ價値の高きか廉きかは白髪の後の人知れぬ笑ひ草、過ぎし昔の草枕に結びし旅路の夢ともならむか、

其七

うき世を蟹の横這ひに這ひ歩いて自己は猿の手の尻に及ばぬ奴といはれながら、何を吐すぞ

蜂は逆倒に家を構へて棲み屏風は曲つて立つとの減らず口、あはれ汐入村の苦學艱難中より彼奴が出たかと歎けば、木偶人を竝べた五個の中より生きた奴が一疋飛び出したりと答へて、淫賣宿の亭主と罵られても平氣の面に懐手の鼻唄三昧、

されど黒田健次また何處やらに人知れぬ案外の急所ありて、をりくその急所に事物の感觸する時は蟹でも猿でも淫賣宿の亭主でもなく、流石に苦學十年の曉より今かくの境遇に落ち込みし男、はつと寢恍面に水を注ぐが如く俄に白癡の物を思ひ出せしが如く、忽然として飛び出し飄然として懐しき舊交の門を叩きぬ、

その懐しき中にも、上田は自然の情に餘ありて處世の理に足らざるのみか、動もすれば時代おくれの友誼熱誠、お情すぎて鐵拳の恐れあり、倉橋は事物の理に餘ありて懇篤の情に足らざるのみか、動もすれば我を厄病神の如く敬遠策に追ひ拂ふべき奴、加之も今は去つて海外



にあり、吉田は近來やうくペンキ塗の學校を這ひ出して風塵いまだ一步の足跡を印せざる青い奴、この苦勞人の相手にならずと數へ來れば、人生そもく幾何の面白き友やある、今なほ眼に浮ぶ汐入村の破床に互の空腹を抱き合せて骨肉の如く交はりしものさへ、以上三人を除いて聊か語るに足るべきは只それ一人の川上三吉あるのみ、元來の性は違へど由來の論に合はねど現在の境遇は同じからねど、わけて言語態度の傲慢は癩に觸れど、また其間に圓轉滑脱として牛の角も折らず馬の蹄も割らず、加之も清濁を呑み込んで快よく談笑する體、此奴の外になしと、平生は其處に居るかともいはざる男、俄に自己が勝手の方角へ氣まぐれの足を向け出しぬ、

臥龍梅の春、萩寺の秋、龜井戸の天神、柳島の妙見、それさへ本所の果の場末とて事なき常は寂寞たる町外れに草屋の軒深く住んで、今こゝに暫く猛獸の睡れる如き川上が籠居の門を不意に叩きぬ、

流石の黒田も打絶えて久しく訪はざりし今日、懐手のまゝ例の横著面をあけて、づかくと通りも得せず、入口に立ちながら殊勝氣の二聲三聲、折しも妻女は今朝より濱町の生家へ行きて、飯炊の婆は臺所の片隅に耳遠ければ、手近き次の室にありし主人の三吉、のツそりと何氣なく立出でて顔みるや否、昔ながらの男振に大口あいて打仰ぎつよ、「やア來たな、まだ無事に生きて居たかい、ハ、ハ、ハ、」  
 まだ生きて居たかと、平生の無沙汰を一本まるられて、黒田おもはず苦笑ひ、「昔は物を思はざりけり、急に何だか懐しうなツてね、ハ、ハ、ハ、」  
 生垣を繞らせし庭の隅々自然に苔むして、武者立の樹蔭に土廂の深く差出でし書齋、何とやら浮世を捨てし風雅めいたれど、床に自慢の一軸もなくて必要の洋書漢籍を抛け込む如くに



積み立てつゝ、此方の壁際には濱町より運びしか住居に不相應なる華紋緞子の長椅子、たゞ實際に簡便なる一閑張の大机を加之も自己が居形に押し据ゑて、悠々と片腕を凭せながらの大胡坐、さりとて客は客といふ體に土瓶の番茶を汲んで黒田の膝前に差置きぬ、

『おい、どうした其後は、久しく來なかつたぢやアないか、やはり依然として例の境遇、あまり惜しくもないが男一疋、捨物に仕てるかね』相變らず酷い御挨拶だが、まづ其邊だ、しかし今日は何だか妙に川柳子の若後家と一般、叱られた事も戀しき魂祭りでね、想ひ起す汐入村の昔日、ハ、ハ、ハ、ぶらくと出掛けて來たのさ』此奴、うまい事をいふぞ、半年の餘も面ア出さずに、油斷のならん奴だ、さらば僕また君に分相應の川柳子が一句を借りて答へて曰く、純友が來て誘ひ出す花の山、ぢやアないかね』や、清淨潔白、決して謀反氣はない、ないが流暢洒落、ちよいと仕た事でも流石に川上その人だ、面白い、話せるよ、迎も上田の仙

人や倉橋吉田の數理的が企て及ぶところにあらずだ、ハ、ハ、ハ、

上げて下しても動ぜぬ川上三吉、じろりと冷かなる眼に黒田の面上を見ながら、聲なき微笑を肩に譲りて残る鼻頭の呵しき、ふんといひぬ、『なアに吐す、馬鹿な、久しぶりだから茶菓子の代りに合はしてやツたのだ、君に面白いの話せるのといはれるやうになつて堪るか』『まだ君、さう早く露骨の丸出を仕なくつても宜からう、茶菓字の後には一獻の御馳走あるべき筈だ』ない、無いぞ、よし芳志はあつても無人で出來ない』なるほど、北の方の御姿が見えぬわい、いづれへ行かれた、其後ますます、蕩閑けて美しう御機嫌の體かね』今朝から生家へ往つて不在だが、居つても無効だ、迎も款待に預かれな近來の境遇だ、諦めて番茶でも飲め』ハ、ハ、ハ、悲しい哉この野郎一人だけが款待に預かれなインだらう、上田といひ當家といひどこへ出掛けても令夫人には不思議と評判の宜くない男だ』何が不思議なもんか、



「喚アばかりでないぞ、いづれの亭主どもにも批評の悪い奴だ」ところが野暮界を去つて所謂  
 彼世界へ行くと、これで案外「黙れ、化物の世界だから人間の出来損ひが持てるんだ」「人間  
 の出来損ひ」「ハ、、、出来損ひ居らない料簡か」「さア、さういはれると聊か困るが、また全  
 然これ出来損ひでも、なからうかと思つてるがね、どツか寧ろ却つて出来過ぎてるかと思  
 する點もあるやうだがね、ハ、、、、」「や、お互に開けツ放しの無遠慮な昔流で斯うはいふ  
 もんの、實ア黒田その點があるかも知れないよ、もしこれが世間へ出ての初対面とか、或は  
 何等か時と場所を限つた一の事物に付いて他人行儀に談判でもすりやア、その惡摺れに摺れ  
 た呼吸と人を馬鹿にする横著さが圖に當つて、なるほど寧ろ出来過ぎた男かも知れないさ、  
 ねエ、しかし黒田、その呼吸も横著さも一切さらに效驗のないところに却つて眞實の友情が  
 あるんだぞ、現在その證據には一言一句かう乃公に面の皮を剥かれながら、さのみ腹も立つ

まい「腹も立たないが、まアさのみ嬉しくもないね」そこだ、うき世に對する喜怒哀樂を自  
 然に忘れて、有難く思へ、腹も立たず嬉しくもないといふやうな人間高尚の神韻に近い趣味  
 が今、君の境遇として身として外にあるか、日夜たゞ罪惡のバチルスを養成する待合の亭主  
 風情として苟も一轉かよる舊友の情に接し得るは殆ど僭上の至極、自分柄に不相應なる莫  
 大の幸福だぞ」

こゝまで有難味を感じさせられては、いかな黒田も二の句は出さず、暫時そのまゝの無言に膝  
 前なる土瓶より番茶を汲んで流し込むが如く二口三口、また貰の煙を天井に吹き上げて朦朧  
 たる行方に一種の眼を注ぐ體、川上おもはず微笑を含みながら、「おい黒田、どうした、甚だ  
 面白からぬ顔色を呈するね、ハ、、、いくら捕提どころのない瓢箪餘でも乃公の前ぢやア固  
 くなるから妙だわい、倉橋や上田ア此呼吸を知らずに自分が固くなつて不可、わけて吉田は



眞面目に謙遜的の後進だ、よろしく此邊の消息を教へて置かう、しかし黒田、さう變に呵しな顔をするな、ふくれッ面は美人でも見よくないもんだ、まして其、その御面相、ハ、ハ、ハ、

しまつた、うツかり轉ばされたと、黒田おもはず舌鼓を打ちながら、「どうしても僕よりやア君の方が人ア悪いぜ、悪いが結局また談話に手應があつて面白いわ、いはゆる碁敵と一般の情、心憎くツツ捨て難い友だね、ハ、ハ、ハ、、偕その段になると上田や倉橋の善人は實に與みし易いもんだ、あの善人ども生意氣に高を括つて動もすると僕を見下し加減に来るからなア、寧ろ却つて黙々たる吉田の初心が披ひ兼ねるさ、や、吉田といへば近來、彼も聊か浮世臭くなつたやうだな、相變らず肅々として來るかね」君なンかと違つて萬事あの通りの秩序的に出來てるから、よくく己むを得ない外ア無沙汰をする筈がないさ、しかし吉田が近來、浮

世臭くなつたとは全體どういふ鑑定だな」むと君、また今の宿所へ往つた事がないね、あの  
上田また何事も言つて來ないかね」いや、千駄木の林町で岡本かねといふ素人家の二階を借  
りた事ア知つてるが、當分このまゝ不出門の籠居で、吉田に限らず上田の家へも近來さらに  
行かない」そこで、僕の鑑定が當るか當らないか一度往つて見るが宜いね、實ア其、その岡  
本かねといふのは四十前後の世話に碎けたらしい後家親でね、頗る惱殺的の美形を備へた十  
六七の娘を持つてるが、加之も其娘なるもの、どこを見違へたもンか甚だ吉田に對して形勢  
不穩の態度だ、ところで例の上田が野暮な恐れを抱いてさ、強ひて吉田を自分の家へ引取ら  
うといふんだ、ハ、ハ、ハ、」むとさうかい、外の事ア兎も角、さういふ鑑定だけは君に信を置  
いて聞かすが、どうだ、既に業に出來た様子かな、まだ出來ない工合かな」かういふ事だけに  
信を置かれるなア少々なさけないが、まだ出來て居まいよ、しかし確實に出來るね、危機一



髪の間だ、一見あの様子ぢやア、事に依ると母親が黙許の程度を越えて闇々裡に加勢するかも知れない、よほど吉田の勤勉と正直と初心なところが母子の御意に叶って、加之も溢れるやうだから『それに就いて本人の吉田を何と見た』元來あといふ人間だから、上田が慌てて恐れを抱くよりも案外、じつと落著いて腰強く前後を考へた上、自己に勝ち得るだけは堪へるだらうが、さて君彼また木石にあらず、どうせ落ちるよ、第一また敵の本尊が自然の男殺しに出来てる女だ』ところで上田の引取説はどう思ふ』無論、世間一般の平凡理窟から言へば宜いこつた、しかし其平凡理窟が讀んで字の如く、さらに雙方の感情を害せず平々凡々に實行し得らるゝかといへば、もはや時機に後れて既に無効だ、相手の母子は固より吉田に於ても多少、妙な念を残して去るに相違ないからねエ、結局あの上田ア例の一本調子で事々物々に熱する外、浮世に對しての曲折がないから不可よ、これが學生時代の吉田とか或は他

に許し難き理由のため束縛せらるゝ吉田ならば兎も角、たとひ何にしても一の専門學を卒へて今年こゝに二十六、いよく世の中へ獨立獨行で出掛けようといふ彼に上田の如き流は有難迷惑だぜ、まづ早い談話が自分の昔を考へて見るが宜い、あんな醜い噂アでも、や、元は君の北の方が腹心の家來で加之も首尾よく御夫婦にならせられた掛橋の忠義女を斯う悪く言つちやア濟まないが、事實あれほど手の込んだ出来ない女ア珍らしいな、その人面に遠ざかつた、化物然たる女でも彼奴が噂にする時、もし横合から變に邪魔を入れて見る、力先生あまり宜い心持は仕ない筈だにさ、ハ、ハ、ハ、まさか岡焼でもあるまいが、殆ど強制的の引取策ア却つて本人のため宜くないよ、願はくば君、こりやア君の口から異議を持ち出すべしだ、事は同じ事で理は一でも僕の口からぢやア不心得の彼奴等、大に感じが薄いやうだ』  
『いや、お饒舌り御苦勞、よく事情は分つたが、分つて見りやア猶更、なアに僕が口を出すほ



どのこつても無からう、また僕に聞かせたくないから上田も吉田も来ないんだ、そんな事ア自然の成行に任して置く方が宜いさ、ハ、ハ、ハ、もう其談話は廢さうぜ、時に黒田、君は今日、まづ待合の亭主になつたが、この川上三吉この柳島の籠居に斯く惘然してるところを、どう見る、何と見えるね、こりやア少々不得手だらうが試みに鑑定してくれ』  
 喋々と饒舌り立てし甲斐もなく、黒田また轉がされて拍子ぬけの體、『もう鑑定は御免だ、あれほど信を置かれた鑑定の御挨拶が、只これ御苦勞の三字だからなア、ハ、ハ、ハ、まして不得手の鑑定どんな挨拶を蒙るかも知れないよ』此奴、ちよいと拗ねたね、ハツハツハツハ、ハ、ハ、』

其八

知らぬ相手の世の中に出ては、たとひ鬼でも蛇でも取つて捻ぢ伏せるほどの男ながら、丸裸

の昔より手足の裏を見られたる川上には流石の黒田も幾度か轉がされし體、今更ら小癩に觸へて其まよ柳島を飛び出しつと、辻車を驅つて眞一文字に我家へ歸りし上、うき世は萬事かうした爪弾の忍び駒に晝寢の酒でも飲んでくれむかと思ひしが、いや待て幸ひの道順、聊か喰ひ足らねど此腹癒せに與みし易き上田を襲うて、加之も其後の吉田いよく林町を夫ツて引取られしか、戀の絲目に搦まれし木像の形勢視察また妙なりと、どこまでも入らざる駄骨の横に張つた奴ながら、さて其間には却つて穉氣を帯びたる兄弟喧嘩に等しく、偽善の華を競ふ當世氣質の交際場裡には夢にも見られぬ一種の味あり、

これも絶えて久しく訪はざりし本所横網町の上田が門口、その格子戸そつと音なく開けて、硯ふが如き額越しに差覗きぬ、『在宅ですかい』  
 折して我口を開きながら箸もて我子の口へ晝餐をすゝめし妻女、おもはず振り返りて、『お